デレマスss　僕の可愛さは不滅ですね！

紅のとんかつ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アイドルマスター　シンデレラガールズｓｓです！

輿水幸子さんと仲間達のお話です！
最初はシリアスですが、全体的にはコメディーでいきたいと思ってます。
キャラがこれじゃない、とかあるかもですし、
独自解釈とかもありお見苦しい所があるかもですが、それでもお付き合い頂けたら凄く嬉しいです♪

後プロデューサーがオリです。
そういうのがお嫌いな方はすみません！
メインはアイドル達ですので！

最後に文章力が拙く、お目汚しがあるかもですが精一杯頑張りますのでご指導ご指摘ありましたらどうぞよろしくお願いします！

目次

第1話　カワイイボクと、魔法使いさん ―――― 1
かわいいボクと、プロデューサー 30
第2話　カワイイボクと、新たな仲間達 ―――― 61
第3話　カワイイボクとアイドルレッスン ―――― 83
その4　かわいいボクと、893！ 113
その4．5　極道なうちと、家族の絆 151
その5　カワイイボクと、ロリコンプロデューサー！ ―――― 178
かわいいボクと、新人さん！ ―――― 198

第1話　カワイイボクと、魔法使いさん

「ねえ、ボクは可愛いですか？」

そうだな。幸子は可愛いなぁ。

お父さんはおもちゃのヘアピンをつける7才のボクに大喜びで感嘆の声をあげる。

子供のボクから見てもボクを溺愛しているのがひしひしと伝わってくる。

ええ、世界一可愛いわ。

お母さんは9才ボクの頭を撫でながら微笑む。
ボクに似て可愛らしい顔のお母さん。まるで宝物のようにボクを大切にしてくれた。

うん幸子ちゃんは超可愛いよ♪

いつも11才のボクを中心に集まる友達。
小学校中の生徒達がボクを持て囃す。皆良い人ばかりで学校が毎日楽しい。
ボクが可愛いという真理に、神様にすら祝福されたような日々に、人生の全てが輝いて見えていました。

そして毎日の美容だけでなく勉学すらおろそかにしなかったボクは、エスカレーター式の中学校へと入学しました。

ボクと同じ学校に通える人たちは幸せ者ですね♪　新しい世界に胸を踊らせ、今まで

通っていた小学校の校門とは違う、お嬢様が通うような素敵な門をくぐった。

そして見た事の無い顔ぶれの新しい仲間達に囲まれて入学式を終え、新しい教室や新しい仲間達に目を輝かせながら皆の自己紹介をワクワク胸を弾ませながら順番に聞いていく。１人１人の紹介をノートに書きながらボクの番を今か今かと待ちわびた。

そして待ちに待ったボクの番、皆さんお待たせしました♪　ボクですよ！

元気よく立ち上がり、教室に振り返り、そして最高に可愛い笑顔をみんなに向けた。緊張や不安なんて無い。可愛いボクの話を皆は聞いてくれるんだから！

「はい、ボクの名前は奥水幸子！　幸せの子と書いて、奥水幸子です♪　可愛いボクと同じクラスになるなんて幸せ者ですよ皆さん！」

そうして、ボクの中学校生活が始まった。

輝かしいスタートに幸あれ！

これはそんな可愛いボクと、これから出会うお姫様達のシンデレラストーリー！

ーーーーーー

半年後、中学校端の個室トイレ。

1人、冷たい空気の個室の中で、自分で作った御弁当箱を広げる。会心の出来栄えを再び確認する事で笑みが零れた。

……ボクが作った御弁当、やはり可愛いですね！　作った人に似るんでしょうか！

タコさんウィンナー、うさぎリンゴ！

ふふふ、とても可愛いじゃないですか！
味は……当然美味しい！
お母さんに頑張って習ったかいがありました！
最初目玉焼きがフライパンに張り付いたり、跳び跳ねる油にびくびくしすぎて落としたり散々でしたが、そこは流石のボク！　料理を3年でマスターしたと言っても過言じゃありません♪　なんたってもう４０種類位おかずが作れますからね！

サニーサイドアップ、
ホットスプリングエッグ、
スクランブルエッグ、
玉子焼き、
　たまごかけごはん！
はいこれで5種類！　玉子ひとつで無限の可能性があります。
玉子は安くて栄養満点で、糖質が少なく調理のバリエーション豊かで、なんて素晴らしい食材なんでしょうか！玉子は最強ですね♪　美味しいですし！
　冷えたにも関わらず美味しさを保ったお弁当を、おかずごはんおかずごはんと口に運んでいく。卵焼きの中のチーズが口の中でトロリと溶け、ほのかに甘い味が舌を包ん

でいく。

ああ、学校で疲れて空腹になったお腹に栄養が広がっていく。

体に、血にエネルギーが行き渡るのを感じる。

自分の御弁当の出来映えを全身で感じとっていた。

そんな時、ボクしかいない静かなトイレの扉がガタリと開かれる。楽しそうな雑談を交わしながら誰かがトイレに入ってきた。

ここは外れのごみ焼却炉前にあるトイレなので人が来るなんてめったに無いんですけどね。まあ、絶対に人が来ない訳じゃありませんし、そういう時もありますか。そしてボクは気配を静かに消す。

息を潜め、物音を立てぬよう静かに顔を伏せた。

すると、その入ってきた人たちの声はとても聞き覚えのある声だった。

「ねぇ～？　幸子の奴、マジウケるよね～」

ドクンッ。

入ってきた人物の聞き覚えのある声音にボクの鼓動が高鳴る。

この声は、うちのクラスの……。

「編入してきた時の自己紹介、マジ引いたわ～（笑）ボク可愛い何回言ってんだよってさ！　どんだけ自分好きなんだよって感じ？」

「最初ギャグのつもりかなって思ったよね～」

……クラスメイトの言葉に、ボクは高くなりそうな呼吸音を抑える。唇を噛み締め、出来るだけ気配を消して、彼女達が出ていくのを待った。

「あれから話しかけてやったら自分の話ばっかだしさ～。超つまんないの！」

「ていうか〝ボク〟ってなんだよって思ったよね～！」

早く、早く出ていって……。

続く罵倒に、思わず耳を塞ぎ混む。俯いて体の震えを抑えながらこの苦しみが終わるのを待った。しかし彼女らの楽しそうな声は一向に止む事が無く、ボクは耳をぎゅっと塞ぎこもうと手を寄せた。

「ねぇ聞いてんの？　幸子」

ドクンッと心臓がさらに大きく鳴る。下卑た笑い声をあげていた彼女らは、気が付いたらボクのいる個室の前に立ち止まっていた。

なんで、ボクだって？　ここに来るのは誰にも見られてないはず……。いつもここに来るまで十分に周囲を警戒し、皆の視線を躱しながらここに来る。昼休みの間、ボクがここにいる事は誰にも知られてはいないはずなんだ。

あまりの動揺に弁当箱の蓋を落としてしまう。

カタンッという音が響き渡った。

「あはは！　やっぱいたし！　ウケる～」

「ねぇなんでこんな所で食べてんの？　教室で皆と食べようよ～？」

トイレのドアをガタガタ引っ張り出す彼女達。ボクは誰にも迷惑をかけずに一人でここにいるだけなのに、何故かそれを許してはくれないようだ。次第にドアを引っ張る力が強くなる。

なんで……別に1人でご飯を食べる位いいじゃないですか……！

「もしも～し？　幸子ちゃ～ん、返事してよ～！」
「いるんだろ？　無視すんなよ～！」

ガタンガタンと執拗に引っ張られるドア。
壊れるんじゃないかと不安になる程激しく引っ張られた。
やめて下さいよ。今は休み時間で、皆には何も関わらず一人でご飯を食べているだけなのに、どうしてそれを妨げようとするんですか。

ガタンガタンッ！

ガタンガタン……。

お願いしますやめてくださいやめてやめてヤメテヤメテヤメテヤメテ!!

ガタンガタン！　ガタン、

……。

ガンッ。

「チッ」

最後にドアを蹴ったような音がした後、足音はトイレから出ていった。その音が聞こえなくなるまでボクは息を殺し続ける。

ドクンドクンッ。

心臓が痛い、痛い位鳴り響く。息が続かない。気が付くと手のひらが汗で湿っていた。

……ふぅ。

深呼吸をすると少しだけ心臓が落ち着いてきた。なんとか、やりきった……。

どうしてこの場所がバレたのかは知らないけれど、それでもなんとかやり過ごす事が出来たのは良かった。あの人たちにこんな人気の無い所で見つかったら、どうなるか解

らない。次は、どこか新しい場所を探さないと……。とにかく、良かった。

そんな風にボクは安緒する。危機がさり、一安心。

……バサァ!!!

突如、一安心したボクの頭の上から白い粉が降ってきた。

……。

……。

……。

頭から真っ白になる。
身体や服だけで無く、ボクが作った御弁当も真っ白になってしまった。
一瞬何が起こったのかわからなかった。
でも、脳が後から自分の状態を冷静に判断してくれた。
……頭の上から、大量の灰が降ってきたのだった。

「幸子ちゃん、おしろいでも着けたらもっと可愛いんじゃない？」

ギャッハハハハ!!!
いつの間に戻ってきたのか、彼女達は再びトイレから出ていく。

……そうか。
ここは学校のすみの、焼却炉前のトイレですものね。お見事ですよ。ボクの作戦を逆に利用したんですね。
御弁当をしまい、ポケットから手鏡を取り出す。頭や服についた灰を落とさないと。
鏡に映るボクを眺める。
……流石ボク。
灰を被ってもお姫様のように可愛いじゃないですか。
指で口角をあげ、ニコッと鏡に微笑んだ。

ーーーーーーーーー
学校の下校時間、ボクは下駄箱の前でカバンから靴を取り出す。

靴いれの袋まで可愛いですね。持ち主に似るんでしょうね。

「あ、君帰り～？」

見覚えの無い子達に話し掛けられる。

しかしその顔を見てボクはさっさと靴を履いた。

その子達はボクの良く知る、下品な笑みを浮かべていたからだ。

「あれ？シカト～？　反応してよそこの可愛い人～」

カカトを整え、昇降口へと歩みを始める。

天を見上げると今日はくもりで、まだ早い時間なのに空が暗い。

「……反応無いし。可愛くないから反応無いのかな？」

アハハと笑い声が響く。

ボクはその言葉にぴくりと反応し、思わず振り返った。

「ええ、今帰りですよ！　さようなら！」
笑顔で振り向き別れを言う。
挨拶も可愛いですね？ボクは。
「あ、こっち見たし。ウケる」
全く見覚えの無いその人達は何が面白いのか再び笑い出す。
指をさし、ニヤニヤと嫌な笑みを向けてきた。
……人を笑顔にしてしまうボク、仕方無いですね。
軽く頭を下げて昇降口から歩み去った。
駅の改札を通り、電車に乗る。
電車を降り、階段を登る。

携帯を開くと着信もメールも無い。
小学校の友達は今では誰もボクのメールに返事をくれなくなった。学校を卒業すれば、疎遠になるのは仕方無い事ですよね。

街に出て、そしてボクは塾に向かい歩き出す。
今日は、雨が降りそうだな。
カバンに折り畳み式の傘が入ってるかを確認する。
……確認ついでに、気付いたら入れられていたカバンの中のゴミを公園のごみ箱に捨てる。
今日は匂うタイプじゃなくて良かったです。
流石の可愛いボクも臭くなるのは不味いですから。カバンを教室に置いてトイレに行ったのは迂闊でしたね。でもちょっと抜けてる方が可愛いですかね？　ボクの可愛いさは欠点すら補ってしまうのです。

……かたかた。

ゴミを捨てる手が震えている事に気付く。
思わず手を押さえ、無理矢理震えを止めようと頑張る。
頑張る、頑張る、頑張る。
止まらない、手の震えが、体の震えが、止まらない、止まらない。

〝幸子は可愛いね〟

誰かが言った、その言葉が頭に浮かんだ。
小学校の頃、家族が、友達が、皆がボクに向けた祝福の言葉。
その言葉が頭をガンガンと痛めつけるように響き渡る。

幸子は世界一可愛いよ。

ギリギリギリギリ。

幸子ちゃんは可愛いな。

ギリ。

手を握る左手が、変色する位強い力で右手を握り潰す。

ボクは可愛いですから！

……。

……。

そして、手の震えが止まった。
頭の上から吊るされていた糸が途切れたように脱力し、ボクは立ち尽くす。

もう、止めよう。
自分の中で自分を偽るのは、もう。

もう理解していた。ボクは神様に選ばれてなんか、いなかった。あの輝かしい毎日は欺瞞だった。
ゴミ箱を見下ろしながらボクは唇を噛み締める。
小学校を卒業して、全て変わった。
違う、正しく見えるようになった。

今の世界が正しい世界。
頭から灰をかぶせられ、知らない子にすらバカにされ、小学校で友達と思ってた人達すら誰もいなくなる。
これが現実、ボクは友達がいないし塾等習い事を山程しないと要領が悪く能力が身に付かない、それがボクだ。

ようやく見えた現実に、中学に入学した時の自己紹介からやり直したいと願ってしまう。
自分の程度をわきまえて、人生をやり直したい、そう思った。
なんでボクは……なんでボクはあんな事を言ってしまったんだろう。
なんでボクはあんな〝勘違い〟をしてしまっていらんだろう。

夢から覚めたように、視界がクリアになっていく。今を知り、現実を知ったボクは夢から覚めたように思考が、表情が冷たくなっていった。

ボクは、可愛くなんか……。

「君可愛いっすね」

そんな風に立ち尽くすボクに、急に軽そうな声をかけられる。そしてつい、その言葉に反応してしまった。

振り向くとオレンジスーツで茶髪の、見るからに軽薄そうな大学生かその位の男性が立っていた。

ニコニコ薄い微笑みを浮かべてボクの顔を見つめ、そして小さく頷いた。

「うん、めちゃくちゃ可愛いわ！　ねぇ、良かったらちょっと話良いっすか？　そこのカフェででも。勿論奢りっすから！」

……１３才をナンパするなんてロリコンなんですかね？　笑顔もチャラ男のそれですね。ネクタイも派手だし、スーツが凄まじく似合わない。

ナンパなんてされたのは初めてですが、普段なら一蹴して出直させる所だろう。

でも、

もう、なんでも良い。

このナンパ男は、遊びでもボクを可愛いと言ってくれる。今はそんな〝おべっか〟が、ボクの心には渇いた土に垂らされた水滴みたく染みていく。例え知らない男に言われたとしてもジワリと荒れた心に吸収されていく。

「いいですよ？　ボ……、私に目をつけるなんて解ってるじゃないですか」

「マジすか!?　いや超嬉し～っす！　貴方みたいな可愛い娘、ずっと探してたんすよ！」

そういうと男はボクを手振り大袈裟に喜びを表現している。こんな何人に言っているか解らない軽い賛美が、今は心地よかった。

「当たり前じゃないですか。私は可愛いなんて世界の常識ですよ」

「うんうん、不遜な態度もまた可愛いすね～！」

「ふふ～ん。もっと誉めても良いんですよ。私は可愛いですか？」

「可愛い！　めちゃくちゃ可愛いっす！」

「どんな風に可愛いんですか？　顔ですか？　立ち振舞いですか？」

「顔も可愛い！　立ち振舞いも可愛い！　さらに声まで超可愛い！」

楽しそうに盛り上がる男。

体を大きく使って表現している。

ははっ、そうですか。私は可愛い、ですか。

「……本当にボク、可愛いですか？」

涙が流れてた。

男がボクの顔を見るとビクッと飛び上がる。

「ボク、可愛いですか？　ボク、こんなボクは……本当に、可愛いですか？」

急いで顔を手で隠す。
やばい、今、きっと凄い酷い顔をしている。可愛くない顔をしている。
ヒックと嗚咽が止まらない。
焦れば焦るほど涙が溢れ出す。

こんなの、ボクじゃない。
こんな初対面のチャラ男に、涙を流して錯乱して、こんなの可愛くない。可愛くない！
ボクは可愛くない。
家族の言葉を真に受けて、親戚や友達に騒がれて、勘違いして中学までそのノリで名乗り出て、皆の前で自慢して。
恥ずかしい。
恥ずかしい恥ずかしい、ボクは勘違いの痛い女の子だ。
所詮ボクは自分で自分を可愛い言ってただけの自称カワイイ、本当のボクは可愛くなんてないんだ……！

男がどんな顔をしてるか涙で見えない。
もしかしたらもう呆れて何処かにいってしまうかもしれない。でもボクは涙を止める事が出来なかった。
もう、嫌だ……。
ボクの欺瞞に満ちた過去も、

恐怖に震える今も、
いつまで続くか先が見えない未来にも、
もう目を背けたくなってしまった。

誰か、ボクを認めてよ。
誰か、ボクを受け入れてよ。

ボクは、可愛く無いですか？

「貴女はまるでお姫様のように可愛いっす!!!」

ビクッ。

突然の公園中に響き渡るようなデカい声で叫ばれて、ボクは思わず顔をあげる。

何が何だか解らないでいると、

そこにはチャラ男が湿った土にスーツなのにも関わらず膝をつき、真剣な顔でボクを見つめていた。

周囲には男の大声でこちらに振り向く人たちがいた。

「……可愛いっす」

……。

きょとんとするボクに、男は周囲を気にもせず膝まずいたままハンカチを両手で渡してくる。ボクが受け取りかねていると、そのままボクの涙を拭いた。

「貴女が可愛いと思った事、ウソじゃありません。その証拠に、この都会の人混みの中からも、綺麗に輝く貴女を見付ける事が出来たんですから」

男は言いながらも照れて苦笑し、ボクにそのままハンカチを手に握らせてくれた。

そして立ち上がり、頭を下げながら男は言う。

「自分に、貴女が可愛いという事を世界に証明する、お手伝いをさせて下さいませんか？」

これがボクとプロデューサーとの出会いの日だった。

この見た目チャラチャラした男との出会いが、ボクがこれから素晴らしい出会いを果たすきっかけになる。

この日、ボクはお姫様になった。

大国で皆に守られたお姫様ではなく、
戦いの耐えない小国の、先陣をきって戦うお姫様に。

かわいいボクと、プロデューサー

あれから半年の月日が流れ。

とある事務所の綺麗に整頓され、ピンクを主体とした壁紙に黄色の電灯、そして青のフロアと目が痛くなるような部屋で、ソファーにゆったりと横に寝そべりながら、手鏡で自慢の唇にリップを塗る。

フンフンフフ〜ン。

鏡に映るボクの柔らかそうなピンクの唇が良い感じに光沢が出来、さらに可愛くなったのを確認できた、にこりと笑顔を確認する。そこには、陰の無い愛らしい笑みがある。もう犯罪的な愛らしさだ。

そしてボクは奇抜な部屋を見渡し、時計を見る。時間は17時の1分前、どうやら時間が来たようだ。パタンと手鏡を閉じ、ソファーに行儀よく座り直し指でカウントダウンを始める。

5、4、3、2、1、

ガチャ！

「幸子さん、お待たせしました！　それじゃ仕事行きますか！」

部屋を開けて入ってきたのは髪を茶色に染め、赤と黄色のストライプの派手なネクタイを絞め、致命的なまでに似合わない紫スーツの肌焼きチャラ男、もといボクのビジネス・パートナー。プロデューサーさんだった。

「プロデューサーさん、相変わらず時間だけは正確ですね。そこは評価してあげても良いですよ？」

ボクはそう言うと座りながらソファーから手を伸ばす。するとプロデューサーは手

を取り立ち上がらせてくれた。
「社会人なんで仕事は遅れられないですよ～。表に車用意してるんで、車で待ってて良いっすよ？　自分事務所の戸締まりとか火気点検とかしてから行くんで。すぐ行くっすから」
「大丈夫ですよ。入り口以外は鍵をかけておきましたし、火気点検もバッチリです。さらに言えばプロデューサーの明日のスーツにアイロンをかけておきました。ボクのプロデューサーがヨレヨレスーツなんて許されませんからね。ボクはなんて気が効くんでしょう！」

マジっすか！
そう言うとプロデューサーは衣紋掛けにかけてロッカーにぶら下げておいたスーツを確認する。

「洗濯したままだったんで、今日仕事終わったらやらなきゃと思ってたんですよ～。いや～、助かった！　幸子さんマジ優しいっす♪」
プロデューサーの嬉しそうな笑顔に思わずボクも笑みがこぼれる。プロデューサーの薄っぺらい笑顔は、それゆえ裏が無く解りやすい。

そしてボクへの感謝の言葉は大袈裟な位大きな声で身振り手振りで表現してくれる。
内心では別の事を考えておべっかを使うなんて器用な真似が出来ないこの人は、人間が薄いからこそ変な誠実さがある。その人格はボクを心から安心させてくれる。

「よし、行きますか。幸子さん、階段気をつけてくださいね」
部屋の電機を消し、扉に鍵をしめる。
そしてプロデューサーは急いで階段を下ると車の後部座席の扉を開く。
ボクが車に乗って、手や足を挟まない事を確認すると優しく扉をしめ、運転席に乗り込んだ。

「シートベルト良いっすか？　それでは車出します。寒くは無いすか？　音楽かけます？」
「大丈夫です。安全運転ですよ？　ボクやボクのお手伝いをするプロデューサーが怪我でもしたら、世界の損失ですから」

〝イエッサー！〟とプロデューサーが敬礼すると、車は発信する。

窓から冬ですっかり暗くなるのが早くなった町の街灯で照らされた景色が動き出しすのを穏やかな気持ちで見つめた。

プロデューサーと出会って半年過ぎ、あれからボクはアイドル候補生としての生活を過ごしていた。

あの時ボクと出会ったこの人はアイドルのプロデューサーで、街でスカウトに勤しんでいた所でボクを見付け、声をかけたそうだ。

「……最初プロデューサーに声をかけられた時はただのチャラ男のナンパかと思いましたねぇ」

「ハハッ、それ皆に言われます。一応スーツ着てるから真面目に見えると思ったんスけどね（笑）」

それはスーツに対し信頼を寄せすぎである。

ていうか茶髪にスーツにド派手なネクタイなんて、寧ろチャラさが増している。

なんて言うか、この人の趣味ははっきり言っておかしい。アイドルのプロデューサー

をしている者が地味ではいけない、そんな良く解らない自分ルールを持っているからこんな奇抜な格好になったらしい。ある程度個性が許される芸能界とはいえ、基本サラリーマンのプロデューサー業に支障をきたすのでは?と思ったが、この人は人付き合いの幅広さを武器に乗り切っている。

そんな武器にボクのプロデューサーとして徐々に活躍を見せてくれて、長い訓練期間を終えたボクに少しづつ仕事を持ってきてくれるようになった。

最初はアイドル？　と思ったが、やってみたら中々どうして、ボクの天職ではありませんか。

ボクの魅力を世界に伝えられ、そして世界はボクの可愛さを堪能出来る。ＷＩＮ－ＷＩＮの関係とはこの事でしょう。なんて素晴らしい相互利益！

あの日この人に出会えた事は、ボクと世界の幸福に繋がったと思っています。

そしてこのプロダクションにとってもボクがいなくてはならない存在だというのは解っている。何故ならこのプロダクションは小さく、所属アイドルがボクしかいないのだ。恐らくプロデューサーがこんな見た目だから誰も集まらないんだろうな～、とボク

は踏んでいるが、ボクが必要で無くてはならない存在なのが嬉しいので、あえて教えてあげない。
お互いが無くてはならない、それは共生と言える。だから、ボクを大切にしてくれると心から安心出来るんだ。
好きな事を言えて、好きなように振る舞える。
本当の自分を出していられる。安心する。
この軽薄そうなプロデューサーが、今ではボクのかけがえの無い相棒になっていた。

「プロデューサーさん？　ボクが大事ですか？」
「勿論、世界一大事っすよ！」

「ボクは可愛いですか？」
「勿論、世界一可愛いっすよ！」
ボクは満足げにフフーンと鼻を鳴らす。
毎日行われるこの軽いやり取りに、ボクは幸せを感じていた。

ボクは友達がいません。でも、今はそれが辛いと思わない。
ボクにはこの人とプロダクション、そしてアイドルがある。友達に割く余計な時間が無いからこそ、よりトレーニングを励む事が出来る。
だから、ボクは友達なんかいりません。そう、ボクは強がりではなく本当にそう思っていた。
今は何よりもこのプロデューサーとこの事務所が大切だ。どんな奴にもこの大切な小さなお城を壊させはしない。この城の姫として、あらゆる敵からもこの国を守ってみせる。まるで姫騎士のように。
戦う凛々しい鎧ドレスのボク、アリですよね！　可愛さとカッコよさが合わさり最強に見える。それほどでもあります！

その為にはまずお仕事！　お仕事を沢山取ってお金を稼ぎつつ知名度を上げなくてはなりませんね。早速今日の仕事についてプロデューサーに確認だ。

「さてプロデューサーさん。今日のお仕事はなんですか？　なんであろうと完璧にこなしてみせますよ！」

「はい、まずはローカル番組での企画で〝巨大サメと戯れよう〟っすね！」

「ふんふん、早速テレビのお仕事じゃないですか。サメのグロチックさがボクの可愛さをより引き立てる事でしょう」

「そして午後からは吉田沙〇里ＶＳアイドル２０人！　可愛いは〝言わせる〟エキシビジョンマッチです！」

「わあ、超有名人との対談まで出来るなんて流石ボクですね！」

「最後は、鳥アイドルコンテストで、レインボーブリッジから空に向かって……」

「ボクが天を舞うなんてまるで天使じゃあないですか！　ナイス演出！」

……って

「殺す気ですか!!!!?」

さっきから嫌な予感、どころか嫌な予断しか出来ないような仕事のラインナップにボクは運転中にも関わらずプロデューサーの頭両手でつかみかかる。

「幸子さん!!　あぶ、あぶねえっす!!」

「仕事の内容がですよね!?」

サメとか鳥アイドルとか人類最強だとか！
それ明らかに芸人とかがやる奴じゃないですか！

「いや確かに危険な感じの番組に聞こえるかもですが、何度も安全確認はしてますから大丈夫っすよ！　サメは絶対壊れない柵の中から眺めるだけですし、鳥アイドルコンテストは下が網になってますし！　吉田沙保〇さんは何も本気で戦う訳じゃありませんから！　ちょっと軽く関節技っぽいこととかするだけで……」

「そのあの方にとっての〝軽く〟がボクには致命傷になりかねないか心配なんですが！」

サメも鳥コンも怖いですが一番恐ろしいのはそこなんですよ！　お医者様の注射の〝ちょっと痛いですよ？〟の比では無い怖さ。だからといってあからさまに痛くなさそうにされてはテレビ的に面白くないからある程度はやって貰わなくてはならないですけどね？

「そこは絶対怪我とかしないんで大丈夫っす。正直、テレビ的にはかなり〝美味しい〟っすよ！」

信号で止まったプロデューサーが笑顔でグーサイン。うぜぇ。

そもそもアイドルに〝おいしさ〟を求めてる時点で既に違うんですよねプロデューサーさん！

でも、だけどもテレビで相当視線を取れるお仕事である上に有名人とのコラボでさらにボクが有名になる一歩としては確かで、確かに良い仕事を取ってきていると言えるの

が困る。

有能といえば有能ですがアイドルプロデュースとしては、このボクのプロデュースとしてはまだまだとしか言いようがありません！　全く、この人は……

「仕方ないですね！　ダメダメなプロデューサーが精いっぱい取ってきた仕事ですから、やってあげますよ！　本当、ボクが担当で良かったですね？　ボクじゃなかったら出来ない仕事でしたよ？」

「はい！　幸子さんならと思って取ってきました！　大変とは思いますがよろしくお願いします！」

そういってプロデューサーは青に切り替わると同時に、周囲を確認し車を出発させた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

アイドルになってからの日々は

「幸子さん！　ＣＭの仕事取れたっすよ！」

「でかしましたプロデューサーさん！　なんのＣＭですか？」

「梅酒です」

「バカですか!?」（未成年）

忙しくて楽しくて。

「この間募金活動していたボランティアの方々に、ボクのこの素晴らしい笑顔を寄付し

てあげましたよ。ボクはなんて優しいんでしょう！」

「イメージダウンになるんで止めて貰えます？」

学校や夜の一人の時間がとても長く感じるのに、実際には此方の方が時間的に長いにもかかわらずあっという間で

「アイドルになったら、ボクの可愛いグッツやアイテムが沢山出来ますね～」

「成程～。輿水幸子パンケーキとかっすかね？」

「可愛くってナイフが入れられないから、それは売れませんね～！」

「幸子クッションとかっすか？」

「ボクを尻の下に敷くなんて、とんだ無礼者がいたものですね！」

「じ、じゃあ無難にストラップとか……。鞄に皆がぶら下げて……」

「ボクを吊るすとかどんな性癖なんですか！」

「よし。幸子さんグッツは無しっすね！」

公園でプロデューサーに出会ってから

「幸子さんはトップアイドルになったら、まず何をしたいですか？」

「そうですね～、まずはボクの慰霊碑を立てて、その周りに幸子ランドを建てたいですね！　ボクの可愛さをたっぷり堪能できる夢の国です！　ではプロデューサーはトップアイドルのプロデューサーになったら何をしますか？」

「毎日の発泡酒をビールに、つまみのコンビニのちくわにチーズを入れますね～。やっべ、テンション上がる」

「おっさん臭い上に小さいですね！」

あっという間に半年が経過した。

――――――――――――――――――――――――

テレビの撮影でオーバーなリアクションをとり、

イベントのお手伝いで精いっぱいスタッフにアプローチをして、

エキストラの役で、その役割を越えない範囲で目立ちまくってやった。

全てボクがメインの仕事ではない小さな役だけれどボクのアイドル活動。

忙しく、大変ではあるけれど一緒に頑張ってくれている人がいたから。

ボクは辛くは無かった。

仕事が終わった車の中。

周囲は夜になり、プロデューサーは遅くなったのでボクを下宿している寮に送ってくれていた。

そんな時、ふと車を止めてボクを公園の高台に連れ出して、そしてプレデューサーはカメラを取り出した。

「こんな所で宣材写真の追加撮影ですか？　全く、プロデューサーはいつも急に、です

ね」

公園の夜景を見て、この場所でも写真を撮りましょうとボクを車から手を取り、連れ出して写真を撮影している。

この人はたまに、空が綺麗な夕闇だから、雨上がりの澄んだ景色が綺麗だから、と普通に撮った宣材写真があるというのに、こうして事務所のカメラでボクの宣材写真を撮ろうと提案してくる。

プロが撮った写真では無いのだから当然使われる事なんて無いのに、この人はいつでも〝今のボク〟をこうして収めようとしてくるのだ。

「この夜の街を背景に撮ったら、またいつもと違った幸子さんが映るじゃないですか。だから少しでも多くの種類の宣材を撮っておきたいんすよ。一枚だけでいいんで！」

言って、高台に立つボクから少し離れてしゃがみ込み、ボクにレンズを向ける。

「こんな近所の公園なんかでボクの宣材写真なんて、本当プロデューサーったら甘いんですから。最低でも函館の夜景位バックにしないとボクの可愛さについてこれません

よ？」

ダメ出しをしておきながらボクの声は弾んでいる。

「大丈夫っすよ！　どこで撮ったって皆が見るのは幸子さんなんで！」

「成程！　それならわざわざ函館まで行く事無いですね！　流石ボクのプロデューサーさんです！　経費をケチろうという魂胆で無い事を信じてあげますよ！」

ボクが自慢げに鼻を鳴らすと、プロデューサーのカメラのシャッターがきられる。ボクは自分のアイドルの宣材写真も自分でやろうとする、この人の無駄な努力が嫌いではない。

だって、その間だけはこの意外にも視野が広く周囲に気を配っているプロデューサーがボクだけを見てくれているから。

「そんな事言いませんよ！　確かに本社のちひろさんに、経費について厳しく言われてるからって、自分のアイドルの為のお金を惜しんだりなんかしないんで！」

「本社勤務の人とはいえ女性に頭が上がらないなんて、情けないプロデューサーさんですね。このボクをプロデュースしているんだから、もっと堂々としてくれないと困りますよ？」

言われなくたって新しくポーズを変えて決めてあげると、終わろうと一瞬カメラを顔から離したプロデューサーさんが戸惑い、微笑み、ボクの意図を汲んでそして再びシャッターを切る。

その意思を感じて、ボクは高台のベンチに寄りかかり、口元に手を寄せて得意の微笑を向けてあげる。

「そう言っても、ちひろさんマジすげぇんで。そういうの、性別だの年齢だの関係無いんすよね～。だから頭が上がらないっすわ。怒ると怖いし……」

「全く頼り無い人ですね。ボクがいないとプロデューサーはダメダメなんですから！」

シャッターの音とボク等の声だけが静かな夜の公園に響く。
肌寒いはずの夜の風が何故か心地良く、疲れているはずのボクの体がいつもより軽くて弾んでいる。二人だけの世界で、聞こえないはずの無い距離なのに、ボクの声はいつもより大きくなってしまう。学校では考えられないくらいはしゃいでしまっている。
そしてボクが今最も嬉しい言葉をプロデューサーが投げかけてくれるんだ。

「そうっすね。幸子さんがいないと、自分困ります」

カシャ……。

「……お、幸子さん！　今の笑顔、今までの中で一番素敵っすよ！　今回こそ宣材写真に

使って貰えるかも！　武さんにも見て貰おうかな！」

そういって、プロデューサーは自分の撮った写真を自我自賛して大騒ぎしている。そんなこの人の隣をボクは呆れたような顔で、大きく伸びをして態度で今日の撮影の終了を示した。そしていつものように嫌味を一つ。

「被写体がいいから良く見えるだけですから、プロデューサーの腕じゃ無理ですよ。もういいですから、さっさと帰りましょう。今日は疲れましたし」

それに今の表情はアイドルとしての顔じゃないから、多分宣材にはなりませんから。

そしてボクはプロデューサーの裾を引っ張りながらボク達の車に引っ張って走り出す。

ありがとうプロデューサーさん。

仕事を取ってきてくれて。ボクを支えてくれて。ボクをアイドルにしてくれて。ボクを、見つけてくれて……。

ボクは小さな声でありがとうを囁いた。

永遠に続いて欲しいと願ったこの時間、しかしすべての物は永遠ではない。
とうとう、この生活が変わる瞬間が訪れる。

「ところで幸子さん、夕食でも行きませんか？」
それは、突然の夕食の誘い。
いつものレッスンの帰り道、いつもより早い解散の日に車の中で提案された。

確かに１９００過ぎましたものね、お腹が空きました。あんまり遅くにご飯を食べる事は美容にも良くないし、いいでしょう。御一緒してあげますか！

「かまいませんよ。このボクに相応しい所に連れていってくださいね？　言っておきますが生半可な所ではボクを満足させる事は出来ませんよ！」
「そう言ってくれると思ったっす！　びっくりド〇キーでいいですか？」

「いいですね！」

「簡単すね！」

この人は何を言っているのでしょう。
和洋中全部選ぶ事が出来てお店の内装も凝っていて、素晴らしい所じゃないですか！
びっくりドン〇ーの良さが解らないなんて、プロデューサーは可哀想な人ですね！

「まあ、今回はもう決まってた用な物なんスが……」
プロデューサーが車を駐車場に入れる。
そして車から出て後部座席の扉を開いた。
ボクが手を伸ばすとボクを引っ張りあげてくれる。

「幸子さん、今日は会って欲しい人がいるっす」
「会って欲しい人？」

なんだ、プロデューサーの二人で食事ではないのですか。仕事の人かな？
でも仕事ならいつも数日前には事前にボクに伝えてくれる人なんですが、今日は急ですね。
そんな風にボクは呑気に、これから起こる出来事をいつもの日常の中の物と決めつけていた。
「ふふふ……！　驚いてください幸子さん、今から会うのは、幸子さんと同じうちの事務所で働いて頂く事になったアイドルです。お待たせしました、仲間ですよ？」
……え？
プロデューサーの軽く発表されてしまった事実にボクは戦慄する。
「事務所に、ボクに以外の、アイドルが？」
この満たされた生活に、また新たな変化が訪れたのだ。

ボクは、小学校の友達や家族達に囲まれていた幸せな生活が、新たなる変化によってあんな風に変わってしまった事をどうしても思い出す。

「はいそうっす！　まだ、アイドル見習いですが、幸子さんに仲間が出来るんす！　今まで1人で負担をかけてしまいすみませんでした」

……そんなの気になんてしてない。

ボクは笑顔で取り繕うプロデューサーに、下唇を噛んで俯く事でしか答えられなかった。

ボクは、どんなに忙しくたってあの事務所の為ならかまわなかった。

今のこの幸せが続くならと願う事があれど大変なんて思った事なんて無かった。

仲間なんて必要無い、あの場所にはボクだけいれば……いいのに。

「来週から正式にうちの事務所に来て頂く事になってますので、今日は顔合わせをして頂きたくて。皆良い子ばかりっすよ。友達になれると良いっすね！」

そしてプロデューサーはお店の扉を開き、ボクを招き入れる。
ふと、学校のクラスメイト達の顔が頭によぎった。最初は友達のように振る舞って、時には笑顔で、時には怒ったようにしてボクを迫害する彼女達の顔が。
……ボクに仲間なんて、友達なんていらない。もう、幸せな時間に余計な変化なんて必要なんて無かった。
ボクにはプロダクションとアイドルと、そしてプロデューサーさんがいればそれで良かったのに。
そうしてボクは憂鬱な気持ちになりながら、お店に入っていった。
店内に入ると店員さんが手慣れた所作でボク達を禁煙席に連れて行ってくれた。
ただひたすら憂鬱なボクに戸惑うプロデューサーさんを横目に、ボクはその新しい仲間とやらを目線で探す。
せめてクラスメイトのような気持ち悪い笑顔を浮かべないような人達である事を祈りながら。

順番に席を見ていく。

優しい笑顔の家族が、お父さんが息子たちにご飯を振る舞っている。楽しそうでなによりだけど、この席じゃない。

落ち着いた感じのカップルが、二人で同じメニューを頼みながら会話を楽しんでいる。女性の方は綺麗な人だが、アイドルになろうという人がいきなり男女関係を見せびらかすハズもなく、ココでもない。

下品な笑顔を浮かべながら学校の先生の悪口を言い合って笑う女子高生達の姿が目に入る。ボクは、どうしようもない感情が胸に一杯になりながら目を反らす。でも、幸運な事にココでも無かった。

そして、窓際の広めの席に近づくと、プロデューサーが明るい声音でボクの背中を叩いた。

「さぁ、この方達が幸子さんと仲間になるアイドル達っす！」

恐る恐る、片目を開きながらその席に座る人たちを見上げた。
すると、ボクが想像していた悪い予感とも望みともかけ離れた三人がボク達を見上げて座っていた。

「ふ、ふひひ……」

キノコを鉢に入れたまま半笑いを浮かべる、色素の薄い女の子。

「アーハハハハ！」

おでこを大胆に開けたワンレンのパンク寄りなファッションセンスの、人目を気にせず高笑いをする女の子。

「あ、あのプロデューサー、もう帰りたいんですけど」

くるくるカールのお嬢様のような髪型と服装をした、既に帰り支度をしている弱気そうな女の子。

そこで出会った人達の笑顔？　はボクの考えていた笑顔とかけ離れたとんでもない人達だった。

続く

第２話　カワイイボクと、新たな仲間達

船の錨やジャングルのような木のオブジェに囲まれた雰囲気の良い内装のお店に美味しそうなハンバーグの香りがみちる。いつもならここに入るだけでワクワクする所だが、今はそんな雰囲気を楽しんでいる余裕はなかった。

「それではご紹介するっすね。こちらが我が事務所のトップアイドル！　輿水幸子さんっス♪」

プロデューサーが新しいアイドルという3人にボクを紹介をしてくれる。そのプロデューサーの言葉に、一人は半笑いのまま軽く会釈し、一人は腕を組ながら品定めするように下からジロジロ見つめる、そしてもう一人はこっちを見ようともしない。

「始めまして、輿水幸子です」

「次に幸子さん、彼女達を紹介するっす。左から星輝子さん、小関麗奈さん、森久保乃々さんです♪　では順番に自己紹介しましょうか？」

自己紹介、という単語にボクはビクッとする。

すると相手側の二人も同じように反応していた。

星輝子さんが皆の顔を見渡し、誰から言うのかタイミングをうかがっている。

誰も言い出さないので星さんが震えながら口を開こうとした。

「ふ、ふひ、わ、わた

「アーハッハッハッ！　私は小関麗奈様よ！　レイナ様と呼びなさい。年齢は１３、世界に私の名を轟かせる為にきたわ！　いずれ世界を征するトップアイドルになる人間よ、覚えておきなさい！」

突然立ち上がり尊大な自己紹介をするレイナ様。なるほど、キャラは伝わりました。

元気とやる気はあるようですね。

しかし小関さんは尊大な態度のままボクをビシッと指差した。

「え～っとアンタ、輿水幸子って言ったっけ？　私はすぐにアンタなんかより上のアイドルになるんだから、覚悟しておきなさいよね」

……ムカッ。

ボクはその言葉に少し苛ついた。

越える宣言はかまわない、どうせ出来る訳ないんだから。だけどアンタなんかは聞き捨てならなかった。

「……小物ですね」

「アーハッハッハッ……、なんですって？」

さっそく火花をちらすボク達。

プロデューサーが立ち上がりあたふたと次の人に自己紹介をふった。

「いや小関さんありがとうございました！　次は……森久保さんお願いします！」

星さんが次は、の辺りでスッと立ち上がりかけていたが、スッと座り直す。

「も、森久保ですけど……。あの、親戚にその性格をなんとかしろって、この事務所に連行されて、あの……」

その辺りで黙り混んでしまった。

紹介の最中も目をそらし、オドオドとしている。この人にアイドルが本当に出来るのだろうか。

「次に星さん！　自己紹介、お願いします！」

不安に思って見詰めるボクにプロデューサーは次の方の自己紹介に移行した。

とうとう指名された星さんは変な汗をかきながら立ち上がる。

「フヒッ！　わ、私は……

「お待たせしました～。ポテサラバケットディッシュで～す！」

美人のウェイトレスさんが注文した食事を持ってきてくれた。小関さんがハイと手をあげ、自分が注文した物だと知らせる。次々と注文を確認しながらテーブルに料理を並べてくれた。

「ご注文は御揃いでしょうか？」
ウェイトレスさんの質問に対し、星さんの頼んだきのこのパスタがまだだと御伝えするとウェイトレスさんは大慌てで戻っていった。
……星さんは覚悟を決めて立ち上がったまま固まっている。

「ほ、星さん、なんか、すみません」
「フヒッ。大丈夫……」

星さんは半笑いで、謝罪するプロデューサーに答える。まるで慣れているのかのように悲しそうにする素振りすらない。

……それにしても、この方達がうちの新しいのアイドル、ですか。まあ印象はともかく少し、言っておかなくてはなりませんね。この事務所に本当に入る、アイドルに本当になるつもりなら、ハッキリと。

「プロデューサーさん。少し席を外して貰えませんか？」

ボクの提案にプロデューサーさんは〝へ？〟と首を傾げる。
ニッコリと微笑み返し、再び席を外すよう頼む。
「女の子同士で確認しなきゃならない事があるんです。それともなんですか？　女子トークに混ざりたいんですか？　変態ですね。そうじゃないなら、ほら、少しタバコでも吸ってきたらいいですよ」
「いや、自分はタバコ吸わな……
「いいから席を外してください」
ボクの言葉に〝はい……〟とショボくれながら店の外に出ていった。しっかり窓から見える位置で、終わったら合図を送りやすい場所で止まり、寂しそうに手を降っている。
プロデューサーさんに手を振り返し、キョトンとする三人にボクは冷たく、しかし威圧感があるような声と目で言い放つ。
「今のうちに言っておきますが、生半可な気持ちで来られても困るので、最初に教えてあげます。アイドルは辛いですよ？学校の他にお仕事をするような物ですし、おそらく

プライベートタイムは無くなりますし、厳しいレッスンが待ってます。だからそれらに耐える自信が無い人や覚悟の無い人はウチに来ないで下さい」

ボクの厳しい言葉、そして自分でもビックリするような声のトーンに、皆目を丸くしてボクを見つめる。心臓の鼓動が早くなる。ボクは、こんなキツい言葉は使いたくない。でも、言わなくてはならない事だ。

「中途半端な事されて事務所の株を落とされても困るんですよね。ハッキリ言ってボク達の事務所はそんなに大きい事務所じゃありません。だから少しの傷が大きな損害になるんです。だから半端な覚悟で来てるような人は、今のうちに帰ってください」

ボクがこの事務所を守るんだ。だから、事務所に害がありそうな人は入れられません。見極めてやる。この三人は本当に覚悟があるのかどうか。

三人はこんな事言われるとは思わなかったんでしょう、戸惑った顔をしながらボクをチラチラ見ている。

その中で小関さんは腕を組み、ふんぞり返りながらボクをにらみ返した。

「フンッ！　随分強い事言うじゃない。でもね、そんな態度で良いのかしら？　私は将

来のトップアイドルよ！　ここで辞めちゃったらアンタ達後悔する事になるわ。だから今のうちにこのレイナ様に媚びへつらった方が身のためよ！」

「だからそれが舐めてるって言ってるんです。入ったばかりの新人が簡単にトップアイドルなんて言わないでください。この世界にはトップアイドルになりたくてなりたくて、努力をずっと重ねて、それでも涙を飲んでいる人が大勢いるんです。そんな人達を押し退けられるんですか？」

小関さんはムッとした顔をボクに向け睨みが強くなる。
そんなちっちゃな脅し、ボクには通用しない。
その態度が気にいらなかったのか、軽く舌打ちをしながらボクに凄んでみせた。

「あんたムカつく。なるわよ！　そんな奴等に負けないアイドルに！」

「どんな風に？」

「は!?　えと、世界にアタシの凄さを知らしめる為のね……！」

「貴女の凄さってなんですか？」

「あ、アタシの凄さは……凄いは凄いのよ！　わかんないのかしら？　まあアンタ程度には解らないかもね！」

「解りません。自己ＰＲも出来ないんですか？　それでトップアイドルになる？　笑えますね」

ガタッ！

とうとう小関さんは立ち上がりボクの胸元をつかみかかる。ボクは座りながら冷静にレイナ様を見上げていた。

森久保さんはおどおどと視線を泳がせ星さんは口を開けて固まっている。

プロデューサーさんは……、

ボクはプロデューサーさんが今どんな様子でいるのか見る事は出来なかった。

プロデューサーさんがとうとう見付けてきた、うちのアイドルになってくれるという人達。

プロデューサーさんがどれだけ苦労してアイドル候補を探しているのかボクは知っ

ている。

毎日電話をして、お仕事の合間を見付けてはスカウトに勤しむ。まだ年が若く、事務所の名前が売れていない中これだけの人数を見付けてくるのは本当に苦労した事だろう。

でもねプロデューサー。

事務所に害になる人かも知れない人達を招き入れてしまう方が、事務所が危険になるかもしれない。だから、プロデューサーに変わってボクが濾過装置になるんだ。

ボクとプロデューサーの事務所を壊す奴は誰であろうと容赦しない。

だから、小関さん。

どんなに睨んでも、ボクは怯んだりしません。

今の貴女より酷い悪意とボクは戦ってきたんだ。アイドルになってからも様々な向かい風や敵意と戦ってきたんだから。

「……もう、言い返せないんですか？　凄んでも怯まない相手には何も言えないんですか？　そんな人にはトップアイドルどころか、アイドル業界すら耐えられません。アイドルを嘗めないでくださいね」

そういって微笑みかけてやると小関さんは涙目になりながら顔を真っ赤にしていた。

心が痛む。

でも、負けるものか。

こんな圧でねをあげるような人は、元々アイドルには向いていないし、耐えられない。入ってから挫けて色々失う前に気付くべきなんだ。プロデューサーも、この人達も。

強い眼差しを向けていると、小関さんの目から涙が溢れた。

「……そうよ、今のアタシは小物よ」

その涙ながらの眼差しに、ボクの心がドキリと跳ねる。

「アンタの言う通り、今のアタシは小物よ！　誰もアタシの力を知らない。誰もアタシの言葉なんて聞きやしない、どいつもコイツもアタシをバカにしてくる！　何をやっても上手くいかないアタシをバカにしてくる！」

静まり返る店内、外のプロデューサーも異変に気付き、足早に中に向かい歩みだした。

「でもね、アタシは負けてない！　今、アタシを見下してる奴も、その努力しているとかいう先輩アイドル候補も、アンタだって！　誰が相手でも関係ない。全部喰らってアタシが一番になってやるんだ！　どんな事をしてもアタシがここにいるって解らせるんだ！」

小関さんは涙を手で吹きながら、それでもボクに訴えるのを止めなかった。

その強い眼差しにボクは目を反らす事が出来ずにいる。

「成り立ての新米だからなんだってのよ！　トップを目指して何が悪い!!　やるからにはその頂点を目指すって事の何が悪いのよ！　アタシはアイドルを舐めてアイツに着いてきたんじゃない、アタシの名前を、全国に届けるために来たんだ！　あんたこそ、アタシを舐めんな……、アタシをバカにすんなぁ!!」

その魂の籠った悲痛な叫びに、店内は静まり返り視線が集まる。星さんが宥めようと立ち上がり戸惑い、森久保さんは口をパクパクさせてボク等を見上げている。そしてボ

クは、小関さんの涙で濡れた強い目を見つめていた。
外からかけつけたプロデューサーさんはが来ると、とうとう小関さんは本格的に震えながら子供のように泣いていて、プロデューサーは手を取り、頭を撫でながら落ち着かせた。その姿は、そこで涙を流しながらプロデューサーの手を取る小関さんを見て、昔の自分の姿を重ねる。周りに押し潰されそうになって、自分を信じる事が怖くて、それでも負けたくなくて。そんな風に一人で戦っていた中、アイドルに、プロデューサーさんに出会って、今を変えたくて戦う事を決めたあの時と。
ボクと、同じなんだ……。

「あ、あの……」
星さんのキノコパスタを持ってきてくれたウェイトレスさんが気まずそうに立っていた。
プロデューサーさんはボク達を見渡すと、ボク達も力なく頷く。
「……お会計で」

ウェイトレスさんから領収書を受けとると、ボク達を連れて店を後にする。

車内。

プロデューサーさんが運転をし、助手席に森久保さん。
後部座席に左から私、星さん、小関さんと座りながら各人の家に送ってもらう。
店を出た後、プロデューサーさんは店前のコンビニで簡単に食事を買ってきてくれた。
ボクの好きなしゃけのお握りを片手に、ちらりと小関さんの方に目を向ける。
小関さんはもう落ち着いていて、涼しい顔で窓の外を眺めていた。
そうしていると、間に座る星さんと目があってしまう。

「ふ、ふひ、いや、あの、しゃけ美味しそうだね、ふひ」
「……星さんもしゃけじゃないですか」
そう言うと星さんは〝あ……〟という顔をして目を泳がせる。すると今度はこちらを振り向いた小関さんと星さんの目が合った。
「ふひ、小関さんは、具、なんだった？」
「……しゃけでしょ」
そうして星さんはまた〝あ……〟と呟くと頭を抱えて下を向く。会話の出だしに失敗した事を悔やんだのか静かに悶えている。
「う、う～。このお握りの具がしゃけだから、しゃけだから畜生……」
良く解らない悔しさを噛み締める星さんに話かけられた事で振り向いていた小関さんと、今度はボクが目が合ってしまう。その目を見て、とうとうボクは踏ん切りが付い

て謝る事にした。

「……ごめんなさい。貴女の事を知りもしないで、偉そうな事を言ってしまって……」

そう言うと小関さんはフンッと再び窓の外を見た。ボクはうつ向きながら反省をしていると小関さんの方からぼそぼそと何か聞こえてくる。

「……れ……さい」

「……え？」

「忘れなさいって言ったのよ！」

そう怒鳴ると小関さんはワナワナと手を動かしながら震えだす。

「あ～、あんな人前で騒いで泣き出すなんて子供みたいな事しちゃうなんて最悪だわ！
恥ずかしい恥ずかしい、黒歴史確定よ！」

「子供みたいというか子供ですけど……」

「五月蝿いわ森久保！　レイナ様に突っ込みを入れるなんて森久保の癖に生意気よ！」

「も、森久保の方が年上なんですけど……」

前で森久保さんがブツブツ言っている。

「アタシはこんな事忘れたいの。だからアンタも忘れなさいよ！　アンタはアンタなりの正義を持って私に立ち向かった、アタシはそれを真っ正面からぶち破った！　その事実だけ覚えて、後はもうこの話はおしまいよ！」

そう言い放ち、恥ずかしそうに窓の外に顔を背ける。その耳は真っ赤に染まり、ぷるぷると震えていた。

そんな麗奈さんにボクはクスッと笑い、頷く。

「解りました、小関さん」

「……レイナでいいわ。今後はアタシの凄さを世に知らしめる為の協力者なんだから。アンタ達は」

あれだけ言い争った相手をもう味方と認めている。この人は、もしかしたら器が広い人なのかもしれない。そうボクは感じた。

ボクは、ボクとプロデューサーの事務所が壊れるのが嫌だった。それを侵略し、破壊する敵かもしれない相手を受け入れるのが嫌だった。

でも、もしかしたら、今より素敵な未来があるのかもしれない。だから、ボクはこの人達を受け入れてみようと、そう思う。

「違いますよ？　レイナさん。今後はボクの可愛さを世に知らしめる為の協力者になるんです。皆さんは」

ハァ!?

と麗奈さんは振り向き、再びキーキー騒ぎだす。ボクも負けずと言い返してやる。

間で星さんが目を回していた。

「アンタね!?　今の流れはアタシに完全に屈服する流れでしょうが！　空気読みなさいよ！」

「それは嫌です！　ボクを屈服させたいなら、それこそトップアイドルにでもなって貰わなくてはいけませんね！　言っておきますが、うちの事務所の仲間になるからにはビシビシ厳しくいきますからね！」

「こんな煩い人達とやっていかないといけないなんて、森久保は頭が痛いんですけど……」

そしてボク達の騒ぐ様子をミラーで見たプロデューサーさんは、微笑みながら皆さんの家まで送ってくれた。

２０分後　車内

「……」

森久保さんが車を降りてお母さんらしき人が頭を下げている。

プロデューサーは左手だけで振り返してあげるとお母さんは嬉しそうに手を振りだした。森久保さんもはにかみながらプロデューサーに小さく手を振っていた。

そして動き出す車。

車の助手席に席を移動しプロデューサーの隣に座る。プロデューサーは運転中は薄っぺらい笑顔を浮かべる事無く真剣そのものだった。その横顔がどこか頼もしい。さっきは麗奈さんの家まで送り、彼女は照れくさそうに帰っていった。

そして静かな車内。

プロデューサーと二人の車は、もう懐かしく感じるようになってしまった。

「……いきなり仲間なんて、驚きましたよ」

「す、すみません。驚かせて喜ばすつもりだったんす」

あの人数が少ない職場に仲間が増える、それは喜ばしい事だったのかもしれない。
でも、ボクは変化を恐れ、再び輝きだした世界が壊される事に脅え、彼女達を敵と決め付けていた。
でも、それは間違いだったかもしれない。
彼女達はプロデューサーと同じ、ボクの世界を輝かせてくれる頼もしい仲間になってくれるかも知れないのだ。

「新しい仲間、彼女たちとは仲良くなれそうっすか？　幸子さん」

「どうでしょうね。彼女達次第じゃないですか？　……でも、仲間とは認めてあげますよ」
そうしてボクは思わず微笑み、いつものように家まで送ってくれるプロデューサーと楽しく帰り道を過ごした。

途中でまだ後部座席に座っていた星さんが喋りだし、いると思ってなかったボクは車の中で大きな悲鳴をあげ、プロデューサーを慌てさせてしまったのは割愛。

いるんなら教えてくださいよ！

忘れててごめんなさい。

第３話　カワイイボクとアイドルレッスン

晴天の空に湿ったコンクリート。

前日に降った大雨が嘘のように晴れ渡り、眩しい光が大地に降り注ぐ。

雨は終わりがあり、そして晴れる日がくる。そんな事を教えてくれるような美しい日、ボクは街中の小さなレッスン場で新しく事務所に入ったアイドル仲間の三人のステップの特訓を見てあげていた。

あの出会いから数週間、彼女達が事務所に来てからボクは暇を見付けては彼女達の指導に当たっていた。だが当然ながら三人は見事なまでにアイドルとしての技能が足りなかった。

ボクと同じ事務所でやっていくのにこんな事じゃいけない、そう思ったら指導にも力が入る物、今では第２のトレーナーのような立場になっていた。

「はい、ここまで！　これから休憩に入りますよ！」
ボクの言葉に三人はヘナヘナと床に座り込む。
「き、キッツいわ～！」
足をだらしなく広げ座り込む麗奈さん。その姿はアイドルらしさの欠片も無い。
「麗奈さん、なんですかそのだらしない姿は！　もっと女の子らしく座れないんですか!?　そしてフロアの真ん中に陣取って休むなんて慎ましさの欠片もありませんよ！」
ボクの指導に麗奈さんはうぇ～、と舌を出す。その反応が既にアイドルらしくない。
「ちょっと休憩でしょ!?　休憩なら休憩らしく気を抜かせてよ！　メリハリが大事でしょ！」
「限度があるでしょう！　はい、ボクかわポイント減点1！」
レイナさんは頭を押さえてギャーと叫ぶ。

ちなみにボクかわポイントとは、ボクが三人に付与するポイントで持ち点が１０点、アイドルとして相応しい技能を身に付けたり、行いや立ち振舞いをすれば加点。三人にそれぞれ渡ったボク自作のスタンプカードに自作のスタンプを押してあげる。

逆にアイドルとして相応しくない行動により減点されていくポイントで、三人の中でもっとも点数が低い人は事務所やレッスン場の掃除や、プロデューサーや皆へのお茶出し等をやるというペナルティが与えられる。勿論その掃除等で良い仕事をすれば加点はしますし、もし持ち点が１００点を越えたら御褒美を約束している。

しかし三人は見事に減点に減点を重ねていて、もはや三人の持ち点は皆マイナスになってしまった。

今の行動で麗奈さんの持ち点は—５９点。

星さんは—４８点。

森久保さんはレッスンからの逃亡等で—８５点にまで達していた。

……はぁ。

三人を見渡す。

麗奈さんはブツブツ言いながらトイレに向かう。

頭をかきながら歩くその振る舞いはアイドルらしさの欠片も無い。体力的には問題

無いし、レッスンにも最後までついてくる。でもダンスの細かい動作は甘いの一言だ。
森久保さんはレッスン場のミラー用のカーテンにくるまり姿を隠している。
あれから一度だって目を合わせてくれないし、いまだにボク達に慣れてくれない。
意外にもアイドルとしてダンスや歌は初心者とは思えないほど上手い。だがあの逃亡癖と人に対するコミュニケーション能力の低さはアイドルとして致命的だろう。
コミュニケーション能力といえば星さんもそうだ。
ハキハキ物を喋る事が出来ず、悲しい事にダンスもトークも不得意。声量には目を見張る物があるのだがいかんせんあの暗さはメディア向きでは無い気がする。
そこでトイレから出てくる麗奈さんを見て、驚愕してしまった。

「今、何しました!?」

麗奈さんは、は？　と首を傾げると、一体なんだよと自分の行動について考える。
「トイレに行ってきただけだけど……」
「その後何をしましたか!?」

ボクに迫られて困った顔をする麗奈さん。困ったのはこっちです。

「普通に、手を洗って出てきて……」
「何で手を拭きました？」
「……こうやってズボンで
「はい、アウトー!!!」

指を向け麗奈さんに説教を始める。

「なんでハンカチとかタオルとか持ってきて無いんですか!?　そうやって拭くなんて、アイドル以前に女の子としてダメですよ！」
「は、はぁ？　そんなにな訳無いでしょう！　どうせすぐ乾くしジャージだってすぐ洗うんだから同じでしょ～が！　ハンカチ洗うのとジャージ洗うって同じ手間じゃない！」
なんという男子的な思考！
このままじゃいけない……！
ダンスとか以前に、彼女達にアイドルとしての振る舞いを叩き込まなくてはいけない事にようやく気付いたボクだった。速やかに改善へと行動に移る。

「ハイハイハイ！　皆集合～！」
パンパンと手を叩き皆を集める。
これは速やかに対処しなくてはならない事態だ。
事務所の存続に関わる大問題に、ボクは絶対解決してみせると意気込んだ。

ーーーーーーー

「はい、それでは今から皆さんにアイドルとして必要な技能についてレクチャーします！」

三人に座らせ、ボクからの授業内容について宣言する。しかし彼女達は事の重要性を全く理解してはいなかった。

「ふひ、アイドルとしての振る舞い、良く、解らないな……」
「ダンスや歌も覚えなきゃいけないのに、そんな事まで覚えるなんて、む～りぃ～」
「そんな事より売れる為の技を伝授しなさいよ」

好き勝手喚く彼女らに呆れながら手を叩いて黙らせる。そんなブーイングが出るのは予想の範疇のうちです！

「何故そんな事を覚える必要があるか……。いいですか？　野球に例えましょう。太郎君は野球をやりたくて野球クラブに入りました」

ボクの例え話をふんふん、と聞いている三人。

「さて、太郎君に最初に教えるべき事はなんですか？　バットの振り方ですか？　ボールの握り方ですか？　違いますよ！　まずはそのクラブのルールでしょう、野球のルールでしょう！　つまり例えるなら今の貴女達はルールも解らずバットを振り回す事を覚えただけで試合に参加しようとする危険なプレイヤーなんですよ！」

お～。

ボクの例え話に関心し拍手をする星さん。

フフンッ。

「つまり貴女達はまずルール、つまりダンスよりも何よりも女の子として必要な動作を覚えてもらわなくてはなりません！　解りましたか！」
「まあ解ったけど、じゃあまず何をすれば良いのよ？」

ようやく意図が伝わり安心する。
そしてボクは水性ペンを取り、ホワイトボードにデカデカと殴り書く。

ドンッ！
「笑顔、です！」

パチパチと拍手する星さん。
「……わ、わざわざホワイトボード用意する必要あったの？　二文字じゃん」
シャーラップ、演出ですよ。
とにかく何よりも、貴女達には女の子の最大の魅力、アイドルの基本中の基本！　笑顔を覚えてもらいましょう。

「まずは麗奈さん、笑顔を見せてみて下さい！」

「え、アタシ？　え、えと、そうね……。アーッハッハッハッ！　どう？」

チッチッチッチッ。

指を振り麗奈さんに駄目さを解らせる。

麗奈さんの頭にピキッと何かが走った。

「全然駄目ですね。大口を開けて声がでかくて、しかもそれは笑顔通り越して高笑いじゃないですか」

「そう、かな。私は、麗奈さんの、元気が良くて、楽しそうで良かったと思うんだけど……」

「ではボクが手本を見せてあげますよ！　こうです！」

片手を口に、口はあまり開けずに優しく微笑む。何処からカメラを向けられても良いように完成された笑顔を作ってやった。

「……どうですか！」

お～、と星さんと森久保さんから拍手が送られる。

「かわ……いいな」

「綺麗、だと思います……」

フフ～ん。

二人の当然の賛美に気分が良くなりますね！

しかし麗奈さんは不満そうに文句をたれていた。

「え～？　なんか作り物みたいな笑顔でアタシは虫酸が走ったんだけど。しかもニコッていうよりドヤッて感じだし」

「ふん、ボクの笑顔の魅力が解らないなんて可哀想な人ですね。さて、次は星さんですよ！　今のボクの笑顔を参考に最高の笑顔を見せて下さい！」

「ふ、ふひ……。なんか、は、恥ずかしいな」

星さんが立ち上がり、ゆっくりと笑顔を作りだした。

……ニゴォ。

バサバサバサッ！
その瞬間、窓の外にいた鳥達が一斉に飛び上がる。
さっきまで良かった天気が崩れ、太陽が隠れ、そして目の前のボク達の顔も停止した。

……。

笑顔になってから反応が無い事に星さんは戸惑い、ボクと麗奈さんの方に振り向き、
そして再び微笑んだ。
……ニゴォ！
グサッ！

ギャアアアアア!!!
ボクと麗奈さんは気が付くと二人で星さんの目に指を突き刺していた。（良い子は真似しないで下さい）

「ギャアアアアア!!!　痛ぇぇぇぇぇ!!」
「ご、ごめんなさい星さん！　体が勝手に拒否反応してしまって……！」
「わ、わざとじゃないのよ!?　わざとじゃないの、多分！」

ジタバタと転げ回る星さんが落ち着く迄五分ほどかかった。

五分後。
「い、色々ありましたが、次は森久保さんの番ですよ！　レッツスマイルです！」

後ろで落ち込む星さんをよそに、次の人を指命する。
「い、いや、楽しくも無いのに笑うなんて、む～りぃ～」

後ずさる森久保さん。

「何言ってるんですか！　テレビに映ってるアイドルだって、面白く無くたって笑ってるんですから！　どんなにつまらなくたってそれっぽい笑顔を作るプロ、それがアイドルですよ！」（注、あくまで個人の見解です）

「アタシはそんな事知りたく無かったわ……」

ボクが説得を続けていると、森久保さんは困ったように一瞬顔を向け、そして少しだけ微笑んだ。

ニコッ。

「「……？！」」

そこにあった笑顔は、何処か儚くて消えてしまいそうな繊細さの中にある広がる小さな幸せ。そんな感情が入り交じるようなとても、とても美しい笑顔だった。思わず三人は一瞬呼吸を忘れ、その微笑みから目を反らせなくなってしまう。

「……やっぱりむ～りぃ～」

ハッとようやく意識を取り戻す三人。

「い、いや凄いじゃない森久保！　今の笑顔、言葉に出来ないけど、凄い美しかったわ！」

「う、うん。綺麗、だった……」

顔を隠してしまった森久保を囲むようにして称賛する星さんと麗奈さん。

「ねぇ、幸子！　今の森久保の笑顔は合格よね！」

カタカタカタカタっ！

震える手でバシャバシャ溢しながらお茶を飲む。

「ま、ま、まあ、良かったん、じゃないですか？」

〝めちゃめちゃ焦っている。〟

震える姿を見て、二人はそれがひしひしと伝わってきてしまった。

ーーーーーーー

「次に〝上目使い〟です！　女の子のコレに男の人は滅法弱い！　これだけ覚えれば男の人を使って人生イージーモードです。では麗奈さん！」

「あ、アタシ？　えと、こう、かしら？」

照れながらも顔を下に向け、屈みながらボクを見つめる。その表情はさっきの笑顔で学習したのか少しおしとやかさを意識している。

「ハンッ！」

しかしそんなのは上目使いじゃない、ただ上を見てるだけだ。ボクは思いっきり鼻で笑ってやる。

麗奈さんはワナワナと震えて拳を作っていた。

「さあて、前座も終わった事ですし、お手本のお時間です。上目使いは、こうです！」ドヤァ……。

「やっぱりドヤァって感じにしか見えないわね」

可愛く腰をひねり、顎に指を当てながら、微笑みを浮かべて皆を見つめてやる。

渾身の上目使いに星さんと森久保さんが拍手を送ってくれた。しかし相変わらず麗奈さんは文句ばかり。嫉妬は見苦しいですよ！

「さて、次は星さんですよ！　渾身の上目使いをお願いします！」

そして星さんは立ち上がるとボクの前に立つ。
腰を曲げ、上半身だけでボクの胸元にまで顔を下げ目をボクに向けた。

クワッ！
「それはガンを飛ばすって言うんです星さん止めてください」
もしかしてさっきの怒ってるのかと思ったじゃないですか。軽くビビったというのは秘密です。ある意味心を動かされました。
「次は森久保さんですよ！　森久保さんなら上目使い位出来るでしょう簡単に！」

ボクのフリに森久保さんはモジモジしている。

「そ、そんなのむ～りぃ～」
「やってみないで何を言ってるんですか！　上目使い位無理なんて言わないで下さいよ！　さぁ、レッツトライですよ！」

「……む～りぃ～」

「恥ずかしがらないで、さあ、さあ！」

迫りながら森久保さんに迫り手を握る。

その行動に何か思う事があったのか森久保さんは顔を赤くし、ボクをチラリと見上げた。

「ど、どうしても、やらなきゃ駄目ですか……？」

ズキューン！

「それよ！　森久保、やるじゃない！　それが上目使いよ！」

「や、やるな。わ、私まで、キュンときたぞ」

二人は森久保さんに惜しみ無い賛美を送る。いやあ、確かに良い上目使いだったん

じゃないですか？

「……んで、あんたは何やってんのよ」

「大丈夫、大丈夫、です」

ボクはうずくまり、心臓の鼓動が早くなるのを無理矢理押さえ付けていた。

至近距離の破壊力、ボクは直撃を喰らい回復に時間がかかっていた。

ーーーーーーーー

サードレッスン

「最後に〝友達に遊びに誘われた時の優雅な断り方〟ですよ！　断ってるにも関わらず相手を不快にさせないというのも重要な技術です！　レッツトライ！」

ボクの次なるステップに森久保さんがはい、と手を上げていた。珍しく積極的ですね！　良いことです！

森久保さんに〝はいっ〟と発言を認めると、森久保さんは冷めた声でボク達にいい放った。

「森久保、友達いないから解らないんですけど」

その発言にボクを含めて皆暗くなる。
全員うつ向き、ブツブツいい始めた。

……別に気にしてなんかいませんがなにか。

――――――――――――――――――――――――――――

それからありとあらゆるアイドルとしての技術をレクチャーしていくも皆のあまりの出来にボクは溜め息ながら座り込む。

やれやれ。先が思いやられる。

正直三人ともアイドルに向いているようには見られなかった。ルックスは申し分無い、寧ろ三人ともとても見目麗しい。しかし、それ以外の要素でやはりアイドルに適しているように思えなかった。

それなのにこの人達は何故わざわざアイドルの道を選んだのだろう。麗奈さんは解る。前回、その覚悟を聞いた。

でもボク達みたいに回りに注目されたいタイプならアイドルになりたいというのも解るが、森久保さんと星さんはそうとは思えない。

そこで、今更ながら彼女達がどういう経緯でアイドルを目指すのか気になった。

「……自己紹介、途中だったから聞いてなかったですけど、皆さんがアイドルを目指そうと思ったきっかけはなんですか？」

ボクの突然の質問に三人は一斉に顔を向ける。

「……森久保は、親戚に性格の矯正で入れられただけですけど」

なるほど。

自分でこの道に入った訳じゃないんだ。ならあんまり積極的じゃなくても、まあ仕方

無いだろう。

「アタシはスカウトよ。地元の公園で、ちょっと学校のバカどもともめてたら、あのプロデューサーが割って入ってきて名刺渡されたわ。貴女の凄さを世界に知らしめる御手伝いをさせてくださいってね」

その話を聞いて、再びボクとプロデューサーが出会ったあの日を思い出す。

あの日のボクと麗奈さんを重ねてしまった。

「まあ、初めてだったわ。アタシを見て、無様に公園で這いつくばるアタシを見ておきながら凄いなんて持て囃す奴。だから、その、利用価値があるなと思って着いてきてやったのよ。アタシはアタシの名を知らしめる為アイドルになった。名を売る手段としては最適だと思ったしね」

麗奈さんはそう言いながら、空を見つめ微笑んだ。

麗奈さんの事をそんなに知っている訳じゃない。だけど、今麗奈さんが何を思っているかだけ解ったような気がする。

「フヒッ、私も、スカウト。アイドル、になりたかった訳じゃ、なかった、けど。わ、私は初めて私を見付けてくれるアイツが、そう望んだから、アイドルに、なる。アイツに、喜んで貰いたい。その方法が、アイドルなら、アイドルに、なる」

今度は星さんが経緯を話してくれた。

星さんは言葉につまりながらボク達に決意を伝えるため、身ぶり手振りで必死に表現しようとしてくれている。

「こ、小関さんと、同じだ。私も、初めてだった。クラスでは、いてもいなくても同じ、空気。い、家でも、同じ。でも、私を必要としてくれる人に、出会ったんだ。だから、役に、たちたいな……」

そういうと星さんも何時もの半笑いとは違う優しい笑顔を浮かべる。星さんの理由もボクは共感できてしまった。

「そ、それを言うなら森久保もですけど」

相変わらず森久保さんはこっちを見ない。
でも、今は自分から自分の言葉を言ってくれた。
「も、森久保だって親戚に無理矢理事務所連れてこられた時は、嫌だったんですけど……。でも、森久保がどんなに逃げても連れ戻しに来てくれて、呆れないで笑いかけてくれる人なんて、いなかったんですけど。だから、森久保の面倒をしっかり見てくれる人だなって、だから、アイドルを頑張ってみようかな、って思ったんですけど……」

三人はそれぞれプロデューサーと出会い、今の自分を認めて貰った。それぞれが自分を見失いかけていた時に、拾って貰えた。
三人は全然性格も見た目も似ていない。でも、どこか自分に似ている。そう感じた。
三人がアイドルを目指す理由は違えど、アイドルに向き合う気持ちを感じ取れた。
そしてボク達は目を合わせ、そして再びレッスンを始める。

「ならばこうして座っている時間は勿体ないですね。次の特訓に移るとしましょう。次は、優雅なレシートの断り方です。トライ！」
「アイドルと関係ないですけど……」

「甘いですね！　真のアイドルなら、店員すらレシート一つでファンにするくらいしないとダメですよ！　常にファンをゲットしていく心構えこそ肝心なんですから！」
「ならないわよそんな触れ合い一つで」
「するんです！」
「む～りぃ～」

ーーーーーーーーーー

その日の夕方　事務所

「あ～、今日も疲れたわね～」
事務所に着くと同時にシャツ一枚になりソファーに寝そべる麗奈さん。
はい、ボクかわポイント減点。
「あ、皆お疲れ様っす～。レッスン今日も頑張ったみたいっすね～」
ボク達に顔を向けて労いの言葉をくれるプロデューサー。
その顔はこっちに向いているにも関わらずその手はパソコンの打ち込みを続けてい

る。

「今カルピスでも買ってくるっすね～。ゆっくりしてて欲しいっす」

そう言いキーボードを打ちながら立ち上がろうとするプロデューサーを制止する。

その間に森久保さんが給湯室に向かった。

「大丈夫ですプロデューサーさん。自分の飲み物位自分で用意出来ますから。あまり彼女達を甘やかさないように」

キリッといい放つボク。

「前は３０秒以内にですよって言ってたのに、後輩が出来ると変わる物っすね♪」

余計な事は言わないで下さい。

こうして考えるとボクって我が儘だったのかもしれない。もしかしたら。多分少し。

過去を反省しているとプロデューサーさんがボクを手招きしていた。

御仕事かな？　と近くに寄ると、プロデューサーは一枚の写真を見せてきた。
和服の似合う、とても可愛らしい女の子。
顔は整い、完成された造形。
愛らしさの中に将来は美人になるというのが確信出来る綺麗さをかねそろえたような女の子だった。

「この写真がなんですか？」

急に写真を渡されてもどうすれば良いか解らない。そういう疑問を浮かべた顔を向けているとプロデューサーがニコッと笑みを浮かべる。

「皆さんの次の仲間っす！」

プロデューサーの言葉に何々　？と麗奈さんが寄ってきた。

「仲間、ですか。この人が……」

再び写真を眺める。う～ん、可愛い方だ。

「へぇ、結構綺麗な奴じゃない！　この麗奈様に相応しい仲間ね！」

前なら、仲間と聞いたらボクは嫌がっただろう。

しかし今のボクは仲間、という物が悪い物じゃないという事を知った。

横ではしゃぐ麗奈さんを見つめ、ボクは胸の内の一瞬の不安がはれていく。

お茶です、とプロデューサーにお茶を届ける森久保さんに、嬉しそうにお茶を受けとるプロデューサーさん。

森久保さんも写真が気になるようで、此方をチラチラと見ていた。

写真を手渡すと森久保さんは〝綺麗〟と呟いた。

「因みに彼女は運動テストでも歌のテストでも最高点っす！　アイドルとしては皆さんに遅れてのスタートですが、頼りになる仲間だと思いますよ♪」

「それは頼もしいですね。この人はいつから此方に来るんですか？」

ボクの質問にプロデューサーはカレンダーを出し、土曜日を指した。

「この日彼女を迎えに行く事になってますから皆様も一緒に行きましょうか！　顔合わ

せ、早くしたいでしょうから！」

成る程、良いですね♪

これからの新しい仲間、たっぷり品定めをさせてもらうとしましょう！

そんなボク達の脇で写真を見ながら星さんが呟いていた。

「村上、巴さん……この住所……村上……」

ーーーーーーーーーーーー

土曜日、村上家前

〝村上組〟

手土産を買いに行ってくるから先に、と言って別れたプロデューサーから渡された地図を片手に村上さんの家にたどり着いたボク達は、青い顔をして厳格そうな和の家の前

にたたずんでいた。

その家はどっからどう見ても、その、なんていうか。

「ヤクザ……」

麗奈さんが口に出しながらボクの影に隠れた。ですよね～。

今までの仲間とはまた違った不安に心が縛られてしまった。

その４　かわいいボクと、８９３！

〝村上組〟

そう墨で書かれた看板を麗奈さんと二人で見上げた。そして二人で地図を確認し、再び看板を見る。

いやいやいや、え？

いやいやいや。

どこからどうみてもヤの着く自由業ですありがとうございました。

「え？　マジここなの……？」

「地図も合ってますし、名前も村上さん……」

……。

二人でもう一度地図を確認し、もう一度看板を確認する。

「いやいやいやいや？　なに、ここに入れって事？　いや、いやいや？」
麗奈さんがキョドりだす。普段のキャラからは考えられないような戦慄した真顔でボクの方にこの〝不可解〟を訴える。
だけどボクだってあまりの事に頭が上手く働かない。
「いや、流石に、何かの間違いでしょ？　だって、アイドルになる子を迎えに来た訳でしょ？　何がどうなって、こんな家に来る事になるっていうのよ。アイドルとの接点皆無なんだけど」
「でも、地図もプロデューサーのメモもここってなってるんですよ!?　さっきから何度も確認してるじゃないですか！　何度も辺りの家を回っても村上さんっていう住所はありませんし……」
最初この場所に到達した時は、家を見て即間違えたと判断してこの場所を離れた。次にこの場所に来た時は疲れているんだと地図を見直した。三回目は面白い冗談だと麗奈さんと笑いあった。そして今四回目に至り、確信させられた。
どうやら信じたくは無いがボク達が用があるのはこの中という事らしい。
「……マジで、マジでここのヤクザがアイドルになろうって訳……？」

写真に写っていた可憐な女の子の写真のイメージがどんどん変わっていく。大和撫子のような和服美少女のイメージから、美人局を食らったような衝撃で。
「……え、ここに、マジで入るっていうの……？」
「そういう、事ですね。残念ながら……」

ごくり。
二人で図らずも同時に、息を飲んだ。
極道〈ヤクザ〉
もはやフィクションのような世界でしかないこの職業の人たちに接するどころか、対面で話をする事になるなんて、どんなアイドルですか……。
「……とにかく、中に、入るしかありません、よね？」
「え、えぇ～……？　アタシは嫌よ……。幸子、あんただけで行きなさいよ。世界に通じる可愛さのアンタならイケるって」
「い、いやいやこの世界に〝かわいい〟なんて単語を知ってるのかすら怪しいですよ。それだったら世界をいずれ制する麗奈さんこそ、その一歩目として行って来たらどうですか？」

「一歩目からいきなり崖に飛び降りるようなもんでしょそんなの」

お互いがお互いの背後を取り合い背を押す。自らを守る為に、お互いを肉食獣の檻に押し出していた。

そんな時に森久保さんの姿が目に入る。ただ静かに、脱力して看板を見あげ、黙って立っていた。その眼には光が無く、口もぽかんと開いていて、動けなくなっていたようだった。

うぅ～、森久保さんも放心しちゃってますし、やむおえません！　妥協案です。腹をくくります！

「解りました！　解りましたから皆で行きましょう！　身を寄せあいながら進むんです！　サバンナの草食動物のように、それで行きましょう！」

ボクから妥協案が提案されると麗奈さんは〝ううっ〟と唸りながらも一応納得してくれたようで小さく頷いた。

そう、こんな時こそ皆で行かなくては何が仲間ですか！助け合いながら、勇気を貰いながら進むしか道は無いのですから！

「森久保さんもそれでいいですね！　皆で、皆で行きますよ！」

ボクの決定を立ち尽くす森久保さんにも同意を求める。すると森久保さんは真顔でこちらを真っ直ぐ見つめてきた。

「無理」

……。

「「え？」」

まったくの無表情でいい放たれた言葉は酷く機械的で、無機質な声色で、しかしハッキリとした声でボク達に向けられた。

「い、いや今なんて……」

「無理」

……。

「無理」

……くるっ。

ズザザザザ！（逃亡）

「森久保ぉおおお!!!」

即転身！

真顔のまま森久保さんは凄まじいスピードで逃げていった。あんなにマジな森久保さんは初めて見た。腕を振って、女の子走りまんまなのにめっちゃ早い。危機を感じた草食動物そのものであった。

「「……」」

森久保さん……。いや、気持ちは解りますけど……。

森久保さんが逃亡した事により仲間が減っただけでなく、自分達も逃げようかという

選択が頭をよぎってしまうようになってしまう。私達は再び看板を見上た。

「ぷ、プロデューサーが来るの待ちます……？」

ボクの脅えきったように提案する。その一言に、二人で黙り混んだ。

い、いや！

「いや、でもこれから一緒に仕事をする仲間にビビってましたなんてプロデューサーに思われたら心外ですよねぇ！　最初が肝心ですし！　ボク達の方がアイドルとして先輩なんですから！」

「そ、それはそうよ、当然じゃない！　新入りに舐められるなんてたまらないわ！　堂々と行ってやろうじゃないの！　そして上下関係を叩き込むのよ！」

「だったら、行くしか無いですよねぇ！ボク達は、先輩であり、誰であろうと魅了するア

イドルなんですから！」
「当然よ！　未来のトップアイドルの、この麗奈様となんだから！」
はっはっは！
どうしてボク達はこう、つい強がってしまうのだろうか……。
８９３の看板を見ながらボクはまた後悔する。

「なら、アンタが先頭……」
「麗奈さんが先頭……」
ドンッ。
その後悔が御互いが御互いの背を押した。

……クワッ！
ボクと麗奈さんは同時に掴みかかる。
そして服を引っ張りあうスマートさのカケラも無い喧嘩が始まった。

群れの中の矢面に立つのはお前だと醜い争いを初めてしまった。
これはもう、カルネアデスの板だ。少しでも生き残る確率を賭けた戦争なんだ。一つしかない救命ボートを求めてボク達はお互いを沈め合う。死にたくない、だから負けられないんだぁ！
そんな血で血を洗う争い（服の伸ばし合い）をしていると、まさかの第三者の介入により戦争は終結した。

ゴンゴンッ。
「ご、ごめん、ください……」
「!?」
争うボク達を他所に、星さんが門を叩いていたのだった。
「ちょちょちょ、星ぃ！　一体何してくれてんのよ!?」
「え？　話が纏まったみたいだったから、ノックを……」

「待って下さい星さん！　話はまとまっても心が纏まってません！　犠牲にする人も決まってません！　まだ心の準備がぁ！」

ボク達の願いはもはや遅く届かない。叩かれた扉の音はもう引っ込んだりしないのだ。

騒いでいると門が開き、中から小指が無いスキンヘッドの出迎えの人が出てきてしまう。

……絶句。

もうやばい。

もう想像するよりやばい。

なんか、こう、この人が出てきたら息が苦しくなってきた。霊圧が半端ない。本物のスジの人というのはこんなにも違うのか。

〝まるでヤクザみたいな人だ〟

と怖い先生や上司を例えて話す事がある。しかし、それはあくまで例えに過ぎないのだと身をもって知らしめられた。本物は、実際に実行力があり、実際に恐ろしいのだ。

こんなにも前に立つだけで呼吸すら困難にさせてしまう。

「お前らか。アイドルっちゅう輩は」

中から出てきたスキンヘッドがお洒落なお兄さんに下から上にジロジロと見定められる。

そして写真を胸ポケットに手を伸ばし、写真を確認した。この人が胸ポケットに手を入れた時、ボクと麗奈さんはビクッとしていたけど、何を出すか想像したかまで完全にシンクロしてたと思う。

話が通っていたらしく、小指が無い人は扉を開き招き入れてくれた。

ーーーーーーーーー

村上家　庭園

ただっぴろいお庭を案内の人の後について歩くボク達。ボクは麗奈さんと両手を繋ぎながらキョロキョロしながら歩く。

麗奈さんの体温が熱いのに顔が青い。多分ボクも同じ顔をしてる。

しかし星さんは堂々と前を向いて歩き、周りにも小指が無い2メートルおじさんにも

脅える事無く進む。なんて頼りになる人なんだろうと初めて思った。いつもは存在感が無、もとい控えめな星さんなのに、今の貴女は大きいですよ！

小声でボク達は星さんに声をかける。

「す、凄いですね。怖く無いんですか？」

ボクの言葉に星さんは〝にへらっ〟と笑い返事をしてくれた。

「ふひ、わ、私はいつも人が、怖いから……。だから、この人達も他の人達も、か、変わらないよ」

頼りになるんだかならないんだか解らない返事にボクも麗奈さんもはぁ、としか返せなかった。

「そ、それに、この人達は、私が話しても、目を見て話してくれる。優しい、ね。フヒッ」

違います星さん、あれはガンを飛ばしているんです。

まあなんとか星さんのお陰で中に入る事が出来ました。後は無事に外に出れる事を祈るだけですね！（笑）

玄関を通り中に通されると、畳の大きな部屋に通された。ボク達の座る用と思われる大きな座布団に座る三人。流石に麗奈さんも正座で静かに座っている。普段からそんな風にしてくれれば可憐なのに。

緑の多く美しいお庭に思わず目が奪われる。

場所はともかく、ここは美しい。

部屋を見渡しても障子には日本風な絵がかかれ、襖には虎や竜が描かれている。

見上げれば書道で一意専心と飾られている。

書道をかじっていたボクにはその字の美しさが少しは解った。

息を飲むような綺麗な風景に癒されていると、すっと虎と竜の襖が開かれた。

「御待たせ、しました」

襖が開かれるとそこには天女のような女の子が立っていた。写真の相手、そして今度からボク達の仲間になる予定の村上巴さんだった。

美しい容姿に美しい着物。

ボク達三人は一瞬で心奪われ、息を飲む。

……ごくりっ。

そしてその後ろからのそりと巨体な鬼が入ってきた。
どうやら巴さんのお父さんなのだろう。シブくて、尾崎豊のような格好良さがある。
恐ろしい容姿に恐ろしい傷痕。
ボクと麗奈さんは一瞬で心停止しそうになり、息を飲む。
……ごくりっ。
二人が一礼し部屋に入ると、対面に置いてあった座布に座った。
二人は真っ直ぐな瞳でボク達を見つめる。

……ヒィイイイ！

何か言って下さいよぉ！　無言の時間が恐怖を増進させる。でも下手な事を言ってしまった日には、きっと明日の朝日を拝めない可能性がある以上下手な事は言えない！

「うっ、うぐっ……ひっく……」

隣で麗奈さんが恐怖に堪えきれず泣いてる。

やめてくださいよぉ！　こっちも泣きたくなるじゃないですか！

「……フヒッ、はじめまして」

……!?

星さんが畳に手をつき、作法はめちゃくちゃながらも丁寧に頭を下げる。ボク達もあわてて頭を下げお辞儀をした。

「わ、私は、星、輝子です。この度、い、一緒に御仕事をさせて、貰います、フヒッ。よろしくね、巴さん。巴さんの、お父さん」

「あ、ぼ、私が輿水幸子です、アイドルです！　よろしくお願いいたします！」

「……うぅ……小関……ひっく、麗奈です……ぐすっ」

星さんが挨拶と自己紹介をしてくれた事が切っ掛けで、お陰でなんとか失礼が無く挨拶が出来た。その挨拶がうまくいったのか、相手のお父さんもニッコリと笑い、頭を下げてきてくれた。

「可愛らしいお嬢さん方につい見とれてしまい、挨拶が遅れやした。村上巴の父です」

「……村上巴じゃ」

二人が丁寧に頭を下げてくれ、またつられてボク達も頭を下げる。

「いや、話に聞いておりましたが本当に美しいお嬢さん方だ。直接お会いできて良かった。まさか、一同全員でそちらから挨拶に来てくれるとは、いや娘を預けるに足る礼儀正しい方々だ。こちらも、とても安心致しました」

そう言いながら優しく微笑んでくれるお父さん。言葉使いは丁寧で、顔は厳ついものの表情は優しい。なんだ、見た目によらず優しい人じゃないか。

プロデューサーで人を見た目で判断しないと学習したつもりでしたが、ボクもあまいな。

ホッと一息。これからはリラックスしてこれからの事と巴さんの事を聞いていこう。そう思い立つ矢先に、部屋の竜の襖が勢い良く開かれ、息を切らした若い丸坊主の男性が大声で部屋に入りんで来た。

「頭ぁ！　向井どもがまた舐めた真似してくれやがりましたぁ！　奴め、今度と言う今度はコンクリ抱かせて海に沈めやしょうや！」

とんでもない事を言ってるが聞き間違いでしょう。その手には短刀が握られてますが、きっとお料理中なんだという事で無理矢理納得しておきましょう！（トランス状態）

いきなりのある意味予想通りの来訪者にボク達の目から色が消えた。

「ゴラァ、ケンッ！　今は御客様が来とるのが見えねぇのが、アン!?　コンクリ抱くのはテメェだボゲがぁ！」

そして先ほどまで優しかったはずのお父さんの一喝。

成る程、これが真の威圧ですね！　凄いです、息が出来ません！

「す、すみませんでしたぁ！　この件は我々だけで奴等に落とし前つけさせます！　行くぞ、テメェ等！」

そういうとケンさんは部下を引き連れ庭へ飛び出していった。

ザッケンナコラー！　という声がどんどん遠くなる。

……。

「すみません、うちのもんが騒がして。どうぞ気にせずくつろいでくだせぇ」

無理ですよ。

もう背筋がピンとなり、体が固まってしまっている。体がすくんで動かないとはこの事だ。

しかし星さんは足をくずして巴さんに出されたお茶を飲む。うまい、じゃないですよ。なんでそんな平気そうなんですか。

「えぐっ……うぅ……おぇ……」

お前は泣くなぁああ！

ボクも泣きたいんですよ麗奈さん！

こんな騒ぎで再び沈黙が訪れる。気まずいよぉ！　巴さんなんで一言も喋らないんだよぉ。

「ご、御趣味は……？」

星さんナイス！

もう今日は星さん大好き！　愛してる！

これで沈黙を切り抜ける事に成功した上新しい仲間（予定）の事も知れる。内心ガッツポーズを決めた。

「趣味ですか、お料理を少々……」

あ、お父さんが答えるんですか。

しかもさっきの見た後だとお料理が不穏に聞こえます。

「フヒッ、可愛い、御趣味です。フヒッ、お得意料理は……？」

え？　広げるんですかその話題。いやお父さんの方じゃなくてですね。

「鮪の解体とか、ハンバーグとかですかね？」

駄目だぁ！　こんな普通の料理すら不穏にしか聞こえない！　ミンチにしてやんよ、とかそんな風にしか聞こえないよぉ！

「フヒッ、今度機会があったら食べてみたい物です……」

「これは嬉しい事を言ってくれますね。では次にお会いする時にお作りいたしますので、よろしければお付き合いください。女の子に御感想頂ける機会などそうありませんし」

このままじゃ駄目だ。次の約束まで発展しそうだ。お父さんの事ではなく巴さんの方を聞いて下さいと目で合図を星さんに送る。

星さんはそれを見てこくりと頷いた。

「幸子ちゃんも食べたいと言ってますので、来週の日曜日に二人で

「巴さんはなんでアイドルになろうと思ったんですか?!」

勘違いにしては凄まじい事を口走る輝子さんを黙らせる意味でも勇気を出して巴さんに質問をすりかえる。あぶなかった。

これ以上この人と仲良くなっても、アイドル的にも命的にも危ない。

ようやく新しい仲間に話題が移り、ゆっくり声を聞けますね。しかし、村上さんの声は厳しい物だった。

「親父の頼みじゃ。そうじゃなきゃ、誰がそんなチャラチャラした世界になんぞに入るか」

……はい?

あまりの一言にボク達は固まった。

そう言って巴さんは顔を背ける。

その言葉にお父さんは〝巴ぇ！〟と怒鳴りつけた。

「まあ確かにアイドルみたいなメディアの力もあれば組も助かるからの。だから親父もアイドルになれゆうんじゃろ？　組の為なら仕方ない。別になりたい訳じゃないがやるからには迷惑はかけん。安心しろい」

うむ。また特殊な人だな。

その特殊な口調は素なんだろうか。

お父さんが困ったように巴さんに説教する。

「巴、お前な、なんでも組の枠で考えるんじゃねぇ。お前の悪い癖じゃぞ？これはお前には組以外の世界を見て欲しいっちゅう願いであってな。だから学校にも馴染めないん

とちゃうか？」

　その言葉に巴さんの頭にビキッと何かが走った。

「学校だの組以外の世界だの、どうでもええんじゃ。腑抜けた世界に興味は無い、どいつもこいつうちの家を聞けばイモ引いていきおる。組を意識しちょるのは寧ろ周りじゃないんけ？　なら周りが望む通り組の娘として生きる。アイドルだろうと学校じゃろうと、うちは生きる限り組の人間として家族に義理を果たす。それがうちの生き方じゃ」

　巴さんはお父さんの顔を睨み付け、言い返す。

　その言葉にはどこか悲しみが感じられた。

「幸子とかゆうたか？　うちのアイドルになる理由は組の為仕方なくじゃ。やるからには迷惑はかけん。じゃが馴れ合う気もない。組に関わりを持つのは抵抗もあるじゃろうが安心せい。無理にこっちに合わせる必要も無いからお互いの利益の為ビジネスとして付き合っていこうや」

そう言うと不機嫌そうに顔を背け、話を終える。再び部屋に沈黙が訪れる。
お父さんは困ったように眉をしかめた。
巴さんの顔を見る。
不機嫌そうに、そして何処か悲しそうなその横顔に、先程から繰り出される言葉に、ボクのさっきまでの緊張が薄れ、そして別の意味で鼓動が高鳴っていた。

「そんな理由なら貴女には無理ですよ巴さん」

「ふぁ!?」

ボクの言葉に、
お前何言ってんの？　と麗奈さんが目線を送ってくる。
巴さんは少し驚いたように目を此方に向け、お父さんは険しい顔だ。
「ななな何言ってるのよ幸子！　あんたまさかまた……！」
「……なんじゃ、やるからにはしっかりやる言うとるし、歌唱力も体力も最高やってお前ん所のプロデューサーも言っとったぞ。何が不足しとるいうんじゃ？」
「色々ありますが、得にこの世界を舐めてる所ですかね。仕方なく？　チャラチャラした世界？　貴女にアイドルの何が解るんです。たかが歌が上手くて体力がある位で何言ってるんですか？　そんな人この世界じゃ山程いますよ。それでもうアイドルになれるつもりですか？　舐めないで下さい」
麗奈さんが隣でやめろ～っと慌てている。
でも止めません。
村上さんは眉をしかめながら此方を睨む。
威圧感が半端無い、本当に年下か？　この人。

でもびびってなんかいない。貴女なんかよりも一人で戦っている時の方が怖かった。

「貴女がどこの誰だろうと関係ありません。家がどうかなんてそんなの怖くありません。大切なのは貴女自身がどうなのかでしょう？　貴女がそんな意気込みじゃ、アイドルにはなれません。アイドルになるという事をしっかり見据え覚悟を決められないなら貴女はいりません」

長い沈黙が入る。

巴さんが険しい顔でボクを睨んでいた。

「もう一度言います。貴女が怖いから拒絶してるんじゃありません。貴女が嫌だから言ってるんじゃありません。貴女がアイドルを舐めてるから言っているんです」

そしてボクは立ち上がり、そして巴さんに手を伸ばした。自分を見失い、誰もボクを見てくれなかったあの頃にあの人がしてくれたように。

「アイドルは甘くない。それをしっかり認識した上で、組がどうじゃなく貴女がどうするか決めて下さい」

目を丸くする。
そう、怖くなんか無い。
あの時の方が、もっと怖かった。
一人でいたあの時の方が。
でも今は、あの人やこの人達がいる。
だから、ボクはもう何も怖くない。

……なんとなく思った。
この人はボク達と同じ、本当の自分を受け入れてもらえず、寂しい思いをしているの

かもしれないと。
だけど、アイドルをなぁなぁでやって貰う訳にはいかない。
ちゃんと見て下さい。アイドルを、ボク達を。
強く巴さんを見つめていると、目を伏せ、悲しそうに俯いた。
ボクの目を怖がるように。その様子を見て、星さんも思わず口を開く。
「……わ、私達も、巴さんを、こ、怖がらないから。だから、巴さんも、怖がらないで、欲しい、かな」
そう星さんが告げると、巴さんがビクッと反応した。
泣きそうな顔でボク達を見つめる。
だから、ボク達は笑顔を向けてやった。
「だれがビビってなんかいるかい！　何を勘違いしとるんじゃ！」
そしておずおずと手を伸ばし始めた巴さん。

「……わ、うちは、ヤクザの娘じゃぞ？」

「さっきも言ったでしょう。そんなの関係ありません」

「たまにいるんじゃ。口だけはそう言う奴が。でも、裏ではうちにビビって……」

「心外ですね。そんな有象無象とこのボクを一緒にしないで下さいよ」

そんなやり取りをしていると、麗奈さんが呟いた。

「ふん、そ、そうよ。あ、アタシもそんな小さな事を気にする人間じゃないわ。アタシのスケールはデカいのよ！」

さっきまで泣いてた癖に、もうそんな強がりを見せている。

でも巴さん。この麗奈さんの強がりは凄いんですよ？　決して貴女に背を向けたりなんかしないでしょう。保証しますよ。

「フヒッ、大丈夫だよ。私は、寧ろこの家の人の方が、好きだし……」

星さんはガチです。

寧ろ組の方々との方が会話が弾んでるまである。

……。

「……全く、怖くないなぞ、なにを根拠にそんな事を言っとるんだか」

そして巴さんは諦めたように微笑み、そして手を伸ばした。

もう一度、誰かを信じてみようと……。

ようやく、前に進めますね。

「だってボクの方が可愛いですから！」

そしていい放つ。
当然の理由を。
「……あ？」
「アイドルにとってそちらの方が重要なんですよ！　腕力も家の力も無意味です！　だから貴女より可愛いボクの方が凄いです！」ドヤァ
……。
「お、お前は何を言っとるんじゃ？」
呆気に取られる巴さん。
そうですよ！　勘違いしてましたね！何をあんなにビビっていたのやら！　ボクが会いに来たのは組じゃない、アイドル候補生村上巴さんです！

巴さんを見る。
確かに可愛らしい、美しい。テストも満点、着物も似合う。
でも、ボクの方が可愛いじゃないですか！
ボクの意図を感じたのか、麗奈さんも吹っ切れた。

「確かにそう考えたら、コイツが入ろうとしているのは暴力の関係無い、アイドルの世界！　なら、先に入ったアタシの方が有利じゃない！　アタシの方が上で先輩なんだからアンタは敬語を使いなさいよ！　そしてアタシを敬いなさい！」

麗奈さんはようやく、自分に後輩（数日）が出来た事のアドバンテージに気付いた。
勝てると思ったら、もはやいつもの麗奈さんだった。

「アイドルになったら、アタシの方が上だって事アンタに叩き込んでやるから、覚悟しておきなさい！　それともビビってアイドルになるのを諦めるのかしら？　それも仕方ないわね！　アーッハッハッハッ！」

「大丈夫ですよ巴さん！　ボクほどじゃないにしても貴女は凄く可愛いですから！　ボ

クの横の引き立て役位にはなれるでしょう！」

二人でふんぞり返り、巴さんを囲む。

ガシッ！

そんな時、いきなりボクの手が掴まれた。

「上等じゃあ～……」

その手を握り潰さんばかりに力を込めてつかんだのは巴さん？だった。

あれ？　顔が怖い。１３歳の目じゃない。

巴さんは、うっかり近付いてしまったボクと麗奈さんの胸ぐらを掴んだ。

「ここまで、ここまで舐められたんは初めてじゃ　！お前ら全員にうちが上じゃって事解らせてやるわ！　村上巴舐めんなよ！　あ!?オイ!!」

「ひ、ヒィイイイ!!」

「やったるわ！　トップアイドルになってお前ら全員黙らせたる！　もう途中で逃がしたりせんからな！　解ったかゴルァ！」

もう全然アイドルじゃない！
アイドルが黙らせてどうするんですか！
しかもそのコラは絶対アイドルの発音じゃないですよぉ！

しかし、巴さんはボクの手を掴み、アイドルになる事を決めた。
怒りと覚悟を込めたその腕で。
そしてお父さんは一筋の涙を流し、微笑んだ。

「止めねぇか巴ゴルァ！　先輩になるお方達に随分な態度じゃねぇか！　アアン!?」

うわぁあああ!!!
お父さん迄参戦したぁ！

そのコラに親子の血を感じます。助けてぇ！
後ろで星さんがウケてた。助けてよぉ！

「親父ぃ！　舐められたらあかん何時も言うとるやないかぁ！　男に二言は無いんとちゃうんか!?」
「巴ぇ！　上下関係はしっかりしろともゆうとるじゃろうがぁ！　金と礼儀と仁義は大切教えてるんじゃ！」
「親子喧嘩ならまずボク達を離して下さいよぉ！　服が伸びちゃう、伸びちゃう！　胸元がセクシーになっちゃうじゃないですか！」
「うぇええ！　うぇええ！」
「フヒヒ、フヒ、フヒヒ」

そんな部屋の外で森久保さんを小脇に抱えたプロデューサーさんが固まっている。

「……どういう状況っすか？」

「もう帰りたいんですけど」

混沌とした状況に、理解をするのに5分間。

ボク達の喧騒はプロデューサーが状況を判断したのちようやく制止に入り、収まった。

その時にはボクと麗奈さんのシャツは伸びきってしまい、常にブラをチラリズムなすっかりセクシーな衣装になってしまっていた。

こうしてボク達に、少し怒りっぽいやんちゃなお姫様が加わる事になる。

その４．５　極道なうちと、家族の絆

組の外ではうちは一人じゃった。
幼稚園の頃はそうでも無かったがどんどんと周りが物心ついて行くにつれ、それが現れてきた。うちの事を本当の意味で理解をし始めたのだろう。そしてうちはうちの事を本当の意味で理解をしていなかった。
受け入れられるはずの無い生まれという事実を。

「じゃけぇ、うちの家でやったらええ！」
小学生の頃の学校の放課後、午前だけで授業の終わる日。
天候も良くて友と過ごし語らうには良い日和。
クラスで皆で勉強会やるっちゅう話になった時、名前は忘れたが、クラスの人気者がうとの隣で大声で参加を募っとった。
だが、どうやら想定していた以上に人が集まったのじゃろう。人数過多で誰の家でも

入れない。そう困っていたクラスメイト達に良かれと思って声をかけた。
「うちの家なら、何人でも簡単に入れるけん、くればええよ！　だからうちも勉強会、入れてくれや！」
　うちは今まで、学校が終わると迎えが来てすぐに離れ離れ、放課後誰かと遊ぶという経験が無かった。だから、こんなチャンスは無かったし、それに良かれと思って声をかけた。
「巴ちゃん家、か～……」
「そ、それはちょっとな～……」

　しかし、返って来た反応は想像とは違った。クラスメイト達は表情を暗くし、困ったように身を震わせる。うちは笑顔のまま表情を固まらせる。
　喜んでもらえるはずのその提案には誰もが笑顔では無く、明らかに困った顔で目を反らしていたからだ。

「お、俺は、いいや」
　一人がそう言って集まりから離れる。すると、私も、俺も、と次々離れていった。ウチは皆が途端に強張り、どんどん離れていく様子にただ戸惑って皆の背中に手を伸ばす

くらいしか出来なくて、そして幼稚園の頃一番仲の良かった子も最後に逃げるように離れて行くのに1分とかからなかった。

蜘蛛の子を散らすようにうちを置いて逃げていく彼女等の後ろ姿には、かつての友達とは明らかに違う物になっていた。

違和感を感じたんはその時から。

それから、学校で遊具の取り合いがあればなんでも譲られた。そしてうちだけ残して遊具から離れて行く。

学校の先公も、宿題忘れた奴等の中にうちがいたらひきつった顔で何も怒らず解散した。

遠巻きに聞こえてきた。

〝あの子はヤクザの子供だから関わるな〟

……まあ、しゃあないやろ。

怖いモンは怖い。今となったら仕方ない事やと理解は出来る。住む世界が違う。奴等には非は無い。

うちは〝ヤクザの子〟なんじゃから。

じゃが小学生のうちは、それが堪えた。

毎日、泣きそうな気持ちで学校に通っとった。休み時間になる度悪い事は何もしとらんのに悪者を見るかのように扱われる。

教室で並ぶ机が皆から少し離れている。そんな小さな出来事で弱いうちは心に小さな傷を作っていく。なんでうちは普通の家じゃないの？　と大切な家族を恨みそうにすらなった。

こんな悩み、親父らに聞かせる訳もいかんかった。だから、家でも強がって〝毎日学校は楽しい。けど家族といる方が楽しいから家にいる〟と言って回っていた。じゃが、うちには一つだけ、心の傷を話せる場所があった。

〝私のお父さん〟

小学生低学年のうちは、学校で出された課題を手に、学校から帰る車の中で俯く。

車で無いと行けない距離に学校がある。

その意味をうちは気付いていなかったんやな。

前は特別扱いされとるんが嫌で、隠れて降ろしてくれと運転手に我が儘も言っとったが、今となってはどうでもええ。

課題は白紙、その紙に溜め息をついた。

「……何か、お悩みっすか？」

運転手の若いのに声をかけられる。

コイツは親父がうちに付けた世話係。

朝から晩までうちの我が儘を聞く外れくじを引かされた奴。

そして、学校で起こった事の愚痴を毎日聞かされるはめになった奴。

うちが幼稚園ときから忙しい親父やお袋に変わり、ずっと世話しとってくれとる奴。

立場的に他では言えない悩みも、家族ではない、うちの世話役で頼りない半端物のコイツといる送り迎えの車の中だけは言える事が出来た。なんの強がりも必要無い、ただ

味方でいるだけの頼りないコイツの前だけは。

今では、なんでも話せるんはコイツだけになってしまった。ウチはため息の原因の紙をミラー越しに開いて見せた。

「課題じゃ。何がお父さんの話じゃ。クラスにうちがいるのにこんな課題出す事なかろうに」

どうせ聞くのは嫌な癖に。

うちは家の事を隠すようになっていた。

自分の家がヤクザな事が、恥ずかしくて仕方なかった。

親父の事が、恥ずかしくて仕方なくなってしまった。大事な家族が、仲間が、恥ずかしくなってしまったんだ。

「親父さんの事、書きたく無いんすか?」

「当たり前の事聞くなや。親がヤクザなんて、言える訳なかろうが」

泣きそうな声で、アイツの席に紙を丸めてぶん投げた。
「……うちがヤクザの子だって、皆で遠巻きに悪口言うんじゃ。近くに言ったら優しく媚びへつらった顔でヘラヘラするのに、影で悪口言うんや！　そんなん、されるなら組の事知られるんは、嫌やろ……！」

大きな声で怒鳴り付けるとアイツは黙りこんだ。ウチの癇癪に、何も言える事が無いのを悟ったのか、ただ黙って車を運転する。
いつもは五月蠅いコイツが黙り、静かな時間が出来る。何か言って欲しかった訳じゃ無いのに零れそうな涙を堪えながら、手を膝の上で握り締めた。なんで、なんでウチは、ウチの大切な人は、嫌われきゃあかんねん。

ふと、窓の外を見ると、車が帰り道からそれて走り出した。
知らない道に入る。いつもの帰り道じゃない、普段通る事のない狭い道。不思議に思い、アイツの顔を見るとニコッと笑い、そのまま車を走らせた。

暫く進むと車が止まり、そしてアイツは黒塗りの車を降りて扉を開き、うちを外に誘った。

夕暮れのオレンジ色に変わった外に出て辺りを見渡すと、そこは前に一度来た事のある遊園地だった。

「覚えてるっすか？　昔親父さんに連れて来て貰った遊園地っすよ？」

そう言うとうちの手を引き、中に連れていく。

中は平日やっちゅうに、楽しそうな家族連れが溢れていた。ニコニコと親に笑いかける子供がいる。アイツは、うちの手を優しくつなぎながら指を指す。

「覚えてるっすか？　あのメリーゴーランド、お嬢はしゃぎながら乗ってましたよね」

親父に連れてこられた遊園地、うちは馬に股がりながら、暴れん坊将軍や！　とはしゃいだ事を思い出した。

あん時、親父は馬鹿みたいに笑いながら若いのにカメラを回させてたな。

「覚えてるっすか？　あのコーヒーカップ、お嬢も親父も、二人して回しすぎて目を回しちゃってましたよね」

……そうじゃったな。

親父も一緒になって回して、そんで降りたらフラフラになっとった。

馬鹿みたいな、でも、凄く、楽しかった。

「作文、別にヤクザの事は書かなくていいんじゃないすかね？　ただ、親父の事を書くの

が課題なんすから。親父さんは、ヤクザである事が全てじゃないっしょ？」

そう言ってアイツはうちの目線に合わせて屈み、さっきうちが丸めて投げた課題の紙を伸ばして渡してきた。

「そして、お嬢も、巴さんもヤクザの娘ってだけじゃないんすよ。貴女には、他にも沢山魅力がある。少なくとも俺は、家族には解ってるすから」

そう言うと、うちの頭を撫でて微笑んだ。うちに課題を握らせて。

「いつか、いつか必ずそれを証明出来る日が来るっす。だから、前向きにいきましょう」

そして、アイツは再びうちを引き、歩き出す。

……うちは、涙を拭いた。

不思議と、もう涙は出てこんかった。

うちは、折角来たんだから観覧車に乗せろと我が儘を言って、そして笑った。アイツはうちの我が儘に、困ったふりしながら嬉しそうに笑う。その日を、なんとなくウチは思い出した。

ーーーーーーーーーーーー

庭に面した縁側に座り、ただ目を閉じている。
あれから、繰り返される人との違う現実に打ちのめされ、沢山悔しい思いをしとった。
だが、あの日から周りに何を言われても組を恥ずかしいなんて思う事は無くなった。

目を開ける。
今までずっと生きてきた綺麗な家。誇りのある、大切な家族がいる家。
部屋ではあいつが、プロデューサーになる男が親父と話をしている。

そして庭には、さっきうちにタンカきった奴等がたむろしていた。

「……あ、幸子ちゃん。大きな、鯉がいるよ。可愛いね……」

「あ、本当ですね！　でも星さん、ボクの方が可愛いですよ♪」

「あんた、何に対抗してんのよ……」

輿水幸子、小関麗奈、星輝子。そして庭にうずくまっとるんが森久保乃々。奴等がこれからなるアイドルの仲間だ。アイドル言うだけあって、皆容姿が良い。

「鯉なんて所詮魚ですよ！　ボクの可愛さの前には鮮やかな色の模様なんて無力です！」

「まあ、近付いただけで餌だと思って集まるあたり、確かに愚かで面白いわね。浅ましさが愚民に近く感じるし」

鯉に餌をばら撒きながら笑う幸子と麗奈。そんな奴らに森久保から衝撃の一言が告

げられた。

「……因みにこの鯉、一匹〇〇〇万円らしいんですけど」

「……それは幸子、あんた負けたわよ」

「ちょ!?」

「餌の値段ですら、一回〇千円、か。ふひ、私より、いい物、食べてるな……」

しっかし何処か、残念な感じがする奴等じゃのう。いきなり心配になってきた。

だが……。

〝貴女の家なんて関係ありません。貴女がどうかでしょう?〟

先程言われた言葉に、胸の何かが温かくなるのを感じた。

ずっと、ずっと誰かに言われたかった言葉。

あの日、あいつに貰った言葉。
それが合わさり、何か、心がフワフワしたような感覚だった。

「巴、話ついたぞ」

部屋から親父が出てきた。
手には書類、後はサインするだけの状態だ。

「一応お前も目ぇ通しとけ。内容はワシが見たかぎり問題はなか。後はお前が納得するかじゃが……」

うちは書類を受け取り、そのままサインした。拇印の為に親指にナイフを当てる。

「いいんか？　中ぁ読まんで……」

「あいつが出した契約じゃ。疑う必要は無か」

そして指を切り、そして判を押す。この瞬間、うちはアイドルになった。
立ち上がり、そして部屋の中に入る。
「お久し振りっすね、お嬢」
「久しぶりじゃな。今は、プロデューサー呼ぶべきか？」
昔、うちの世話係として一緒にいてくれたあいつ。一番辛かった時期に一緒にいてくれたあいつ。あいつがこうして再びウチの前に帰ってきた。またウチを迎えに来た。
「驚いたわ。本当に、アイドルのプロデューサーに成ったんやな」
「成りました。色々な物乗り越えて、素晴らしい仲間を得て」
そう言って、懐かしい薄っぺらい笑顔を向けてくる。
成し遂げたい事がある。あの日コイツは同じような笑顔浮かべて親父に組を抜けると言った。
あん時はまさかアイドルのプロデューサーじゃとは思わんかったが、コイツはそれなりの筋を組に通し、そしてカタギになった。

そして今度は親父によって、うちがコイツの所でアイドルになる事になる。

「……いいんか？　うちは組の娘じゃぞ。その事実は変える気は無いし、隠す気も無い」

答えは解ってる。

だが、その答えが聞きたくてたずねた。

「勿論です。お嬢、いや巴さん。貴女の魅力が組だけじゃない事を証明しましょう！微力ながら、御手伝いをさせていただきます」

そしてプロデューサーはあの時と同じように屈み、手を差しのべてきた。

……相変わらずギザな男じゃのぉ。じゃが、悪い誘い文句じゃない。

「……いいんですか？　巴さん。アイドルになって」

コイツもコイツで解りきった事を。

もう決めた。決めた事を後から変えたら女が廃る。
組を見ず、うちを見たアイツらの発破を受け、誰にも負けないアイドルになる事を。

「よろしく頼むぞ、Ｐ」

手を差し出した。するとＰは童話の中のお姫様のように手を受け止める。

この日、うちは変わる。
アイドルに、成るために。
誰にも〝恥じない〟アイドルに。

ーーーーーーーーーーーーーー

組の出口で荷物を積み込む。
家族総出で門の前に並び、そして頭を下げた。
「「行ってらっしゃいませ、お嬢！」」
「おう、行ってくる」
若いのに手を上げて車に乗り込んだ。
「……巴に何かあったら、地獄見せたるからな。この世の何処までも追いかけて地獄見せたるからな」
自分でPに応募した癖に、今更Pに脅しをかけている。ヘラヘラと大丈夫ですと笑うPに、親父にゴクリと喉を鳴らす幸子と麗奈。
車の中で幸子らが話を始めた。
「しかし、Pさんがここで育ったなんて知りませんでしたね」

「拾われたねぇ。でもその割に言動が軽いわよね。ちっとも怖く無いし」

まぁな。

じゃが別にアイツはヤクザだった訳やない。

あくまでうちの世話係、たまに祭りの出店やったりしたが、基本はそれしかやっとらんかった。

「……あの」

途端に前に座っとった森久保が振り返った。

森久保はおずおずと絆創膏を差し出してきた。

「指から、血が、出てるんですけど……」

「おお、さっき判押した時切りすぎたか。悪いの。森の字」

絆創膏を受け取り指に軽く巻く。

確かに少し多目に血が出ている。
すると幸子が信じられないといった顔でうちの顔を見ていた。

「判って、今時血判ですか!?」

「当たり前じゃろう。うちの人生を預けるんじゃからな。そん時は血で契約するんが常識じゃ」

「いやいやいや、そんな常識無いでしょ!?」

すると小関まで否定しはじめた。いつもこうしとったんじゃがな。

「とにかく、アイドルは自分の体が資本なんですよ！　自らの体に傷をつけるなんていけません。もう二度とそんな事許しませんからね！」

・・・・・・・。

「……なんですか、その目は！　解ったんですか!?　巴さん！」

親父以外に説教されるなんざ、久しぶりじゃのう。怒られたにも関わらず、気分は悪くない。

「解った。もうせん」

そういって腕を組み背もたれに体重を預ける。

「解ればいいんです！　巴さんの場合、世界の正しい常識から叩き込まなくてはいけませんね。いいですか？　皆さん、帰ったらまたアイドルに相応しい振舞いについて指導しますからね。心の準備をしておくようにっ！」

うえ～っという声が上がる。

フッ……。こんな年の近い連中が、周りで笑っとるなんて、初めてやな。

「……いいか？　巴に手ぇ出しても殺すけんね、解っとるか？」

車の外で、親父がまだやっとる。いい加減恥ずかしいからやめい。

いい加減Pも困り初めていた。親父の威圧をこうも耐えるんはある意味すごいのお。

「当たり前じゃないっすか～。プロデューサーなんすよ？　手なんか出しませんよ」

「ちっとは出さんかい!!!　ワシの巴に魅力が無いっちゅうんか!!　アァ!?」

「いやいや手を出したら殺す言ってましたよね!?」

「おう言った。少しでも口説いたらコンクリに埋めたる」

「……つまり娘の為に死ねと？」

親父に迫られ、そして若いもん迄Pを殺さんばかりに威圧をかけていた。もう恥ずかしいから止めてくれや。

そしてとうとう解放されたＰがふらふらと車に乗り込む。
しかし外から若い奴等が
「事故ったらッスゾゴラァ！」
「お嬢に怪我させたら小指じゃすまねぇぞ！　解っとるんか!?アァ!?」
とがなり立てている。
森久保がひぃいいと小さな悲鳴をあげた。

「お、お待たせしました皆さん。シートベルトはいいっすか？」

もうとっくに出来とる。ていうか幸子と小関が青ざめとるからさっさと出せ。森久保なんぞ過呼吸寸前じゃないけ。
「ふひひ、手厚い見送りだね……」

星がニコッと笑いかけてきた。恥ずかしい。

Ｐが車にエンジンをかけて周囲を確認した。
コンコンッ。

窓が叩かれる。
Pが窓をスライドさせ、親父の顔を見た。
「……感謝する。巴を、組の外の世界に連れ出してくれた事を」
そして親父は微笑み、プロデューサーの頭を撫でくり回した。
周りの若いもんらは急に泣き出す。
「巴が、組のせいで苦しんでた事は知っとった。じゃが、ワシは組の世界以外知らんけ、組の娘として幸せにしてやろうとする事しか知らなかった」
そう言って、親父はうちに微笑みかけてくれた。
「じゃがな、気付いたんじゃ。いつも寂しそうに、一人で将棋指す巴をみて。組であるかぎり、あいつは外に幸せは無い。じゃが、組にいてもワシの娘である以上組の奴等は巴に対して無礼は働けん、外の連中と同じ一歩引いた付き合いしか出来んとな」
そして親父は車から離れ、そして整列した若い奴等と共に、涙を流す。

「じゃからアイドルの皆さん。対等な目で巴を見てくれてありがとうございました。これから巴を、よろしく、よろしくお願いします！」

「お嬢ぉおお!!　絶対成功して下さい!!」

「お嬢ぉ！　頑張れぇ!!」

それぞれが大声でうちの応援をしてくれる。

「おう、出せ」

プロデューサーに出発の合図を出す。外の連中に見向きもせず。

「いいんですか？　村上さん、答えてあげなくて……」

輿水が隣で心配そうな顔で覗き込んできた。

星はうちの代わりに組に手を振っている。

「結果を出すんが、うちの返事じゃ。言葉なんか、必要ない」

そして、車が走り出す。

後ろから何人かの若いのが走って追いかけてくる。見えなくなるまで、大きな声で応援を送ってきた。

「必ずボクがトップアイドルにしてみせますから!! 楽しみにしていて下さいね! ですから幸子、輿水幸子をよろしくお願いします!! よろしくお願いします!」

窓から幸子が手を振っている。

こんな時も売り込むとは良い根性しとる。

「ふぅ〜、なんとか生きて出れたわ」

小関がへなへなと背もたれに崩れる。

森久保もようやく大きなため息を落とした。

……そしてうちは、手で額に当てながら俯いた。

「ふひっ、良い、家族だね……」

星が、微笑みを浮かべてハンカチを渡してきた。

「おう、自慢の家族じゃ」

うちはハンカチを受け取り、うっとおしい涙を拭き取る。

……覚悟を決めた。

先程、仕方なくアイドルになってやるだけ、そう言った自分を殴りたくなった。うちは、絶対、絶対トップアイドルになったる。そう心の中で固く誓う。これからの未来にウチは、一つ大きな覚悟を持ち家を後にする。

その5　カワイイボクと、ロリコンプロデューサー！

巴さんを迎えに行って帰った頃にはもう夕方を越え夜になってしまっていた。
しかし、この町はまだ外には遊ぶ若い人たちで溢れている。とは言っても、流石にボク達ほど若い人達はいませんけどね。
事務所に上がり、中に入るとなんだか今日だけで懐かしく感じるようになってしまった。お父さんが旅行から帰ってくる度に、やっぱりウチが一番だぁ、て言う気持ちが解りますね。

「帰ってこれたぁああ!!」

麗奈さんも同じ気持ちだったのか、プロデューサーの上着を脱ぎ、いつものソファー

に寝そべった。はい、ぼくかわポイントマイナス１。
そしてボクもプロデューサーから借りた服を脱ぐ。
「うぅぅぅ！まだ春先とはいえ、冷えるっすね～！」
ふうとため息を付くボク達の後から下はスーツ、上はシャツ一枚でネクタイを首にかけるプロデューサーと共に、巴さん達が部屋に入ってきた。
「情けない男じゃのぉ。格好つけるなら最後まで格好つけぇ」
巴さんになじられながら、プロデューサーは自分のロッカーに歩いていった。中から薄目のコートを取り出して身を包む。
「あ～、温かいわ～」
因みにプロデューサーがなんでこんな奇抜な格好になったか。
それは簡単な話、麗奈さんや巴さんとのやり合いでボク達の服がびろんびろんに伸びていたから。帰り道途中でご飯に降りた際、ボクと麗奈さんの服が伸びて胸元からブラがチラついていたのを見て、プロデューサーが悲鳴をあげたのだ。
するとプロデューサーが自分のスーツを脱ぎ麗奈さんにかけ、そして自分のＹシャツ

を脱いでボクにかけてくれたのだ。
〝これで大丈夫っすよ。大切なアイドルに、そんな恥はかかせられませんから〟
と微笑みながらキメ顔で。
優しい言葉に優しい笑顔。
ボク達は確かに嬉しい気持ちはありました。あったんですがそれ以上に新たに発生した問題にばかりボク達は意識がいってしまった。

プロデューサーの格好である。

下は紫のスーツ、これはまあ良いでしょう。
そしてその上は、
Tシャツ一枚に黄色のネクタイ。
そして茶髪にピアスの男が立っていたのだ。
プロデューサーはそのまま食事の為にサービスエリアに行き、そのままの格好で車を運転していた。
もう、死ぬほど恥ずかしかったのは言うまでもない。でもね？　あんなに格好よさげに決めた人の親切を無下にする訳にはいかないじゃないですか！だからボク達は微妙

な表情で受け入れるしかなかった。
巴さんはやるのぉ、とプロデューサーを誉め、そして星さんも森久保さんもなんら気にする事なくプロデューサーの横でご飯を食べていた。
恥ずかしいのはボクと麗奈さんだけですか!?
せめて、せめてネクタイは外して下さいよ！
そんな心の叫びは届く事無くこの格好のまま事務所まで帰ってきてしまった。
お仕事関係の人には見られてない事を切に願う。

「それじゃ、皆さん長く車に座ってて御疲れっすよね！　少し休んでいて下さいっす。自分、巴さんに事務所を案内して、巴さんとの契約書を保管してデータにしたらそれぞれのお家にお送りしますんで！」

そう言ってプロデューサーがソファーの前の机に温かいお茶を並べた。しかし、それは流石に申し訳無い。疲れているのは運転してきたプロデューサーでしょうし。
「いえ、案内位はボクがやりますよ」

そう言ってボクは巴さんの前に行き、事務所を案内を始めた。

とは言っても、うちの事務所はそんなに大きい訳じゃない。
二階建てのビルに、一階は車を入れる車庫と物置がある。
二階には学校の教室四つ分位のスペースに、扉から出てすぐにロッカー、そしてついたてを挟んで事務用の机が四つ並び、そのうちの一つにデスクトップパソコン。
そして部屋の一番奥に、麗奈さんがよく寝そべるソファーが並んでいる。そこには大きめのテレビが一台。

扉から見て左側に簡単な調理室、その隣にシャワー室やらが並び、最奥には仮眠所がある。
二階に上がればほぼ全ての場所が見渡せる。
そんな場所だから、現在地から動く事無く案内を終わらせてしまえた。

「……成る程、確かに小さい事務所じゃが一通り施設はそろっとるようじゃな」

腕を組みながら辺りを見渡す巴さん。
まあ、その気になればここに住めるだけの設備はありますね。

現に、プロデューサーは結構な頻度で事務所に寝泊まりしている。
人がいない分、多く働けるよう考えた設備だ。
ボクのプロデューサーが働き者なのは構いませんが、たまには家で休んで欲しい物です。
「そしてこのビルの隣にレッスン場にトレーニングルーム、簡易ステージがあります。まあ、それは今度案内しましょう」
「おう、どうもな。幸子」
そしてボク達もソファーに座り込んだ。
「後は事務所で皆それぞれ自分のポジションを決めて過ごしています。ボクと麗奈さんはソファーにいますし、星さんはプロデューサーの机の下に良く潜んでます。森久保さんは窓のカーテンの中だったり、仮眠室の横の隙間だったりとまちまちですけど」
そう言って森久保さんの所在を目で探すと今日はパソコンの机の下に隠れているみ

たいですね。あんな所にいないで、ソファーに座れば良いのに。

プロデューサーが机から書類をまとめてパソコンの机に座った。森久保さんが閉じ込められてしまった。

パソコンで何かをプリントして、そして紙を巴さんに差し出した。

「巴さん、今日から宿泊する場所はもう借りてあるんで。必要な物は俺が揃えるっすから、そこに書いておいて下さい！」

そこには冷蔵庫や洗濯機等〝既にある物〟とかかれた箇条書きの一覧に、下に記入欄がある。

ボクの時も書いたな、それ。

「……なんじゃ、部屋借りるんか？　そんなん金の無駄じゃ。P、お前マンションで一人暮らしじゃろ。そこでええよ」

!!!?

……ゴンッ！

巴さんの問題発言にボクは思わず立ち上がる。
Pさんの座る机からは頭をぶつけたような音がした。
「何を馬鹿な事言ってるんですか巴さん！」
「なんじゃ幸子、ルームシェアっていう奴が今流行っとるんじゃろ？　新たに部屋探すより、そっちのが安く済むけん。うちも稼ぎ始めたら生活費は折半すれば、うちもPも費用が大分浮くじゃろうし、そんなデカい事務所でもないけ、費用は少ない方がええじゃろ？」
立ち上がり講義するボクに〝ん？〟と首を傾げる。プロデューサーさんは困ったように笑っている。すると麗奈さんや輝子さんまで乗り出した。
「確かにそれ、いいわね。よし、P。アタシもそれに乗りたいんだけど。そうすりゃ迎えに来る時間も減らせて楽じゃない！　親から離れて自由になれるし！」
「ふひっ、なら、私も、そうするかな……。ふひっ、ルーム、シェア、なんか、リア充の

響きがするね……」

「いやいやいや皆さん何言ってるんですか!?　大丈夫ですか!?」

皆の狂気の発想にボクは悲鳴をあげる。

皆は何が悪いの？　といった顔だ。

「あのですね!!　ボク達はアイドルなんですよ!?　プロデューサーとはいえ、男性と同棲なんてスキャンダル物ですよ！　皆さんアイドルとしての自覚あるんですか!?」

「……ふ、不潔なんですけど」

本当この人達大丈夫なんだろうか！

唯一良識のある森久保さんも机の下で戦慄している。

「何も考えすぎじゃ無いんけ？　まだうちらは子供じゃぞ。世間様じゃ保護者代理位にしか見えんじゃろ？」

「馬鹿な事言わない！　ボク達は既にレディなんですから！　はい、ボクかわポイント減点！」

え～っと皆からブーイングが飛ぶ。

本当アイドルというか女の子としての自覚が無さすぎますよこの三人は！

プロデューサーもハッハッハッと笑って誤魔化すばかりだ。

「そ、それに、プロデューサーは、ロリコンなんですけど……」

・・・・・・・・・・・・。

「え？」

森久保さんの発言に、ただ笑っていたプロデューサーが目を飛び出させた。ボク達も一斉にプロデューサーを見る。

「おい、P。お前、そんな変態に成り下がったんか？」

「へ、変態!!変態!!変態!!変態!!」

さっきまで意識して無かった二人まで一斉にプロデューサーをなじり始めた。

プロデューサーへの熱い風評被害。

「ちょ、ちょっと乃々さん！　何を言ってるんすか！　そんな訳無いっすよ！」

焦りながら机の下に向け必死に否定するPさん。こっちの角度から見るとシュールですね。

「でも、プロデューサーがスカウトしてくる子、大体中学生なんですけど。プロデューサーのお眼鏡にかかる子は、中学生なんですけど……」

「いやいやいや、たまたまっすよ！　たまたま！」

プロデューサーも焦ったように否定する。

言われてみたら、確かにそうですね。今いるメンバーは全員中学生だ。

そう考えた麗奈さんは自分の体を隠しながら、ジトリとプロデューサーをにらむ。

「そういえば、アタシを見る目が何処かいやらしかったわね。この変態、アタシと同棲して何をするつもりだったのよ!!」

「見てないっすよ!?　それに自分は別にルームシェアに賛成なんてしてな……」

「まあ仕方ないですよ！　こんな魅力的なボクがいたんじゃ、ロリコンにもなりますよね！　ボクが中学生だから好きなんじゃなくて、ボクが好きだから中学生が好きなんですよね？　プロデューサーさん♪」

「幸子さん！　今そういうの止めて下さい！」

「そういうのとはなんですか！」

いよいよロリコン疑惑が本格的になり、プロデューサーも思わず立ち上がる。
皆から責められ、星さんのいる机に飛び付いた。
「ふひっ？」
「輝子さん！　輝子さんは自分の事信じてくれるっすよね!?」
現状唯一プロデューサーを責めない星さんに泣き付いた。
中学生に助けを請う大人、それもどうなんでしょうね。
「ふひ、大丈夫、私は、プロデューサーを、信じてる、ぞ……」
「し、輝子さん……！」
涙目になり星さんの手を掴む。
ほっと胸を撫で下ろし、味方を得た事でプロデューサーに余裕が戻った。
「プロデューサーが、ロリコンでも、私は、プロデューサーを信じるぞ……。大丈夫だ、

ふひ」

「信じる所違うじゃないですか!!　やだー！」

変態コールが事務所に響き渡る。

まあプロデューサーがロリコンなのはなんとなく知ってましたけどね！

「いや、ちょ、ま、ちょ待てよ（キムタク風）第一、自分中学生以外もスカウトしようとした事あるっすからね！　沢山！」

プロデューサーがそう言って昔スカウトした事があるアイドルの名前をいう。

「例えば今マーチングバンドで有名な日下部若葉さんとかですね！　ほら大人！」

ふふ～ん。

……いや、寧ろロリコン疑惑が確信に変わりそうですプロデューサーさん。

麗奈さんと巴さんが後ずさる。

森久保さんがひぃい、と机から這い出てきた。

「森久保ぉ、早くこっちに来なさい！　皆で身を寄せ会うのよ！」

「おらぁ、P！　こっち来たらぶっ飛ばすけんな！」

本格的な警戒が始まった。

思わずボクもその群れに混ざりそうだ。

「いや！　いやいや！　あと早苗さんという警察の方をプロデュースさせてとお願いした事が……！　あれ？あの人は寧ろロリ顔か？」

「警察のお世話になったんかいな!!!」

「前科ありなんですけど！　前科ありなんですけど！」

「後、神崎蘭子さんというアイドルを……」

「　　や　　は　　り　　中学生か！」

収集つかない位混沌に包まれる事務所。
星さんが奥で楽しそうに笑ってる。

「あとは、あとは……」

あたふたと記憶を整理するプロデューサー。

その時、何かを思いついたように
はたっ！　と手を叩く。

「あのカリスマ女子高生、城ヶ崎美嘉さんをスカウトしようとした事があります!!」

自信満々にキラキラした顔でボク達を見た。

いや、あの、女子高生というのはどうなんだ……？

「ほ～っ、良かった。ならロリコンじゃ無いわね」

「安心したんですけど……」

ほっと胸を撫で下ろし、プロデューサーの所に戻る三人。

カリスマすげぇ、あの混沌を名前だけで沈めてしまった。

「ていうか、凄いじゃないですか。あのカリスマの城ヶ崎さんですか？　超スーパーアイドルじゃないですか！」

ボクの反応にふっふっふっ、と得意気に笑うプロデューサー。

「彼女がアイドルになる前にね、声をかけて断られた事があるんすよ！」

あ、断られたんですか。
ならなんでそんな偉そうなんですか？

しかし、プロデューサーさんが、城ヶ崎さんをスカウトですか。
この茶髪ピアス派手スーツのプロデューサーさんが、チャラ男にしか見えないプロデューサーさんが、城ヶ崎さんをスカウトですか。

「なんて声かけたんですか？」

「え？　そりゃ、君可愛いっすね～っ少しそこの喫茶店で話いいっすか？　て声かけました！」

・・・・・・・・・・・・。

「なんて返ってきました？」

「〝アタシ、そういうのいいんで〟って、

めっちゃ冷たく言い放たれました（ ；ω；）」

でしょうね。

やっぱりプロデューサーさん、その頭とスーツなんとかした方いいですよ。

その後プロデューサーさんの話を聞くと、本当に沢山の人をスカウトしていた事が解った。

中には今アイドルとして活躍してる人もいて驚いた。

そして解りました。

プロデューサーさんが中学生しかスカウトしていたんじゃない、大人の女性には相手にされていなかっただけだったみたいです。

因みにカリスマ中学生城ヶ崎梨嘉さんもスカウトして、

プロデューサーにもなついてくれたらしく、詳しく話をしましょうと事務所に連れていこうとした所を城ヶ崎（姉）に警察を呼ばれてしまった逸話まであった。

その時来た婦警さんが早苗さんという方で、事情聴取の時にその人までスカウトしようとしたものだから城ヶ崎（姉）からはゴミを見るかの如く嫌悪に満ちた顔をされたらしい。

ロリコン疑惑を解消と共に、自分の悲しい仕事歴をさらしたプロデューサーがふらふらと事務所の扉を開く。

「……んじゃ、帰りますか」

とぼとぼと車を回しに行くプロデューサー。

少しいじり過ぎましたかね？

「相変わらずあいつはいじめがいがあるわね」

満足したような笑顔を浮かべ階段を降りるプロデューサーさんを眺める麗奈さん。

ボクも思わずクスッと笑いが溢れてしまった。

かわいいボクと、新人さん！

「気にいりません」

作業机でパソコンからデータをプリントしているプロデューサーの前でボクは腕を組ながら仁王立つ。

プロデューサーさんはそんなボクを〝ぽかん〟と間の抜けた顔で見上げていた。

場所は事務所、プロデューサーさんの間の抜けた顔を夕日が窓から差し込んで温かく照らしてくれている。

夕方特有のやんわりとした空気の中にも関わらずボクの顔は険しかった。

ボクの一言に麗奈さんも森久保さんも頷きながらソファーに座っている。

「え～と、自分のスーツの柄がっすか？」

それはいつもです。

なんですかオレンジって。漫画だったら成金キャラが着る色ですよ。

紫、白黒縞模様、赤、オレンジ。

この人が普通のスーツ着ているのを見た事が無い。喪服にすら水色とか着ていきそうだから困る。

しかしボクは首を横に振ってその答えを否定した。

「え～と、なら今度のお仕事っすか？」

それもありますね。

なんですか、外国紹介でパプアニューギニアに行ってジャングル体験って。それ大体お笑いの人が行く奴じゃないですか。でも今の気に入らないはそれじゃない。

「……解った！　今日の幸子さんのコーディネートっすね！　大丈夫です、今日も良く

お似合いですよ！」

「レッスンあがりでジャージですけど。ああもう、勘の鈍い人ですね！　新人の話ですよ!!!」

そう言ってボクはプロデューサーに詰め寄った。

そう、気に入らないのはこの前入ったばかりの新人アイドル、村上巴さんの話だ。

ボクの言葉にソファーに横たわる麗奈さんが同意した。

「解るわ幸子、あんたの気持ち。後輩の癖に生意気って言いたいんでしょ？　あいつには先輩を敬おうって気概が無いのよ。生意気ね！」

「貴女が良く言えますね!!!　でもその通りです！」

寧ろ誰に対しても偉そうで生意気なのは貴女ですよ！　ですがボクの今言いたいことは確かにソレだ。

「勘違いしないでください。別に敬語を使えとか、気を使えって意味じゃないんです。でも！　しかしながら！　巴さんにはボク達に対する敬意がまるでありません！　だから彼女は今までのボク達の考えを、浸透させてきた創意工夫を無下に扱うんです！」

「無下に、ですか？」

「そうです！　まずはボクのパーフェクトな自主トレレッスン表、まずこれを見てください！　さあ！」

詰め寄ったボクに体を仰け反らせるプロデューサーの顔にスケジュール表を押し付ける。

「これを！　見て下さい！このレッスンのタイムスケジュール、見て下さい！さあ！」ぐ

いぐい

「えっと！　程良く休憩を取られていて、体を動かすレッスンとそうじゃないレッスンの比率を考えられていて、よいスケジュールかと！」

頭を抑えつけられて椅子から落ちるに落ちられないプロデューサーが涙目になってボクのレッスン割をみやる。その角度で本当に見えてるんですか!?　まあいいですけど。

「そう、ボクなりに皆さんの体力や練度を考えてのメニューなんです！　一番体力の無い人に合わせる、集団訓練はそういうものであり良く練られたレッスン計画！　それを、ボクがレッスンで計画された休憩を指示した時巴さん何て言ったと思います!?」

「えっと、休憩に反対したとか？」

違いますよ。

そうならまだ良かったです。

「こう言ったんですよ。
〝なんじゃ、もうバテたんか？〟って……」

……。

「〝いえ、まだですけど!!〟ってなりますよね！」

「〝あんたが後でバテないか心配だわ！〟ってなるわよね！」

「え!?　なります!?」

なるに決まってるでしょう！
プロデューサーなのにアイドル魂が解ってませんね！

それがどれだけ大変だったか。

それの説明の為に今日のレッスンまで遡る。

今日はダンスレッスン。
基本中の基本だからこそ重要なステップを皆に浸透させる為の練習。
そのレッスンはもはや五時間にも及んでいた。
その練習に大型新人、後輩の村上さん。
彼女を囲むようにして星さんも麗奈さんも森久保さんも座り込んでしまった。ボクもなんとか気合いで立っている、そんな状態だ。
今村上さんに立ち向かえるのは今やボクだけ。だから、ボクが三人の分も思いを伝えなければならない。

使命感を胸に、ボクは村上さんに声を張り上げた。
「休憩しましょう!!!　これ以上は、もう休まないと、いや寧ろ終わりにしないと……」
「もうけ?　バテるんが早いのぉ。幸子ぉ、麗奈ぁ、お前らそんなモンか?」
「いいえ、まだまだですが!!!」
「後でバテたって知らないわよ!!!」
「むぅうううううりいいいいいい!!!!」
間髪いれずこの返事。このやり取りはもう六回目。
終わらない無限ループにとうとう森久保さんが大声を上げた。
ありがとう森久保さん。
なんかもう、ボク達は反射でこう答えてしまう病みたいです。絶対に引き下がりたくない。

体は限界でもこうなってしまったら、もう他人の声無しに止める事は出来ないんです。

森久保さんらしくない叫びに、ようやくこの負の無限ループから解放された。

本日初の休憩タイム、というか今日の所はもう終わりにしたい。そんな限界点を到達した体を表情に出さないようにしながら周りを見る。

星さんはう～っと唸りながらパンパンになった足をマッサージしている。

麗奈さんは涼しげに座っているも足がガクガクに震えている。

森久保さんなんか、たいいく座りで血が出る位下唇を噛みながらボク達を尋常じゃない目で睨んでいた。ごめんて。

事の原因の村上さんはと言うと、一度給水に来たっきり休憩ゾーンには近付きもせずダンスの動作確認中。

どんな体力してるんですか!!

有名アイドルグループにまでなると、ライブで五時間フルスロットルで動きっぱなしなのにその苦労をおくびにも出さないらしいですが、なに、貴女はもうその領域なんですか?

「のう、森の字。さっきのサビのステップなんじゃが、お前綺麗だったのう。なんかコツがあるんか?」

「ひぃ!」

そう言ってカーテンにくるまろうとする森久保さんにアドバイスを貰いに行く村上巴さん。

その向上心に複雑な気持ちになった。

村上さん。

彼女はプロデューサーさんの言う通り、ダンスも歌も素晴らしいの一言だった。

初めて聞いたステップは〝こうかの?〟と一回で決めてみせ、

初めて歌の特訓を始めた時はその声量、特にこぶしやビブラートの技巧にボク達は揃って苦笑いを浮かべるしか無かった。

しかもああやって周りに解らない事を聞く事を躊躇わない、それはボクや麗奈さんには無い向上心だった。

ボク達は聞く位なら倍練習するがボクのモットーですから。だって聞くって、その人に負けてるみたいじゃないですか！

そんなかんだで、この事務所でボクの次に技術のあるアイドル候補生になるのに時間はかからなかった。ボクの次に。

これでもボクだって1年前からアイドル候補としてレッスンを積んできたんです。体力には自信がありましたが、それをこんな入って数日の新人に振り回されるなんて実に気に入りません！

ていうか、レッスンの主導権をさりげなく握っている事もまた問題です。

さっきみたいに、ボクが一日のメニューをこなす為に必要である休憩を取るよう指示をすれば〝まだやれる〟、〝もうかいな？〟等と横槍を入れるのは当たり前。

酷い時はルーキートレーナーさんの休憩指示にすら逆らい特訓を止めない。ルキさん陰で泣いてましたよ！

今だって巴さんがまだ練習しているから、頑張り屋の星さんが頑張って立って巴さんの所に向かおうとプルプル震えている。十分努力しているのにもかかわらず自分がさぼっているような罪悪感が出てしまっているのでしょう。それは問題だ！

そして、その、なんというか、ボクとしてもいつリーダーの座を取られてしまうか気が気ではない……。とにかく！その位成長が目まぐるしかった。

「くっそ～、巴の奴、良い気になりやがって……」

そう言って歯軋りをする麗奈さんにボクは内心シンクロしてしまいそうになる。

首を降って雑念を振り払った。

いやまだ、まだ負けてませんよ！

このままでは、このままではいけない！

今までは不動のエースだったのに、まさか、いや一万分の一の確率でその立場がひっくり返されようとしている？

そうは、そうはさせませんよ巴さん！　この業界の先輩アイドルの恐ろしさを教えてあげます！

なんとかしようと自分の凄さをアピールする言葉を模索していると、横で麗奈さんが

絶対周りに見せられないような悪どい顔をして何やら村上さんの御茶に何か入れていた。

その行いにボクは止まってしまう。

「ヒッヒッヒッ・・・」

「麗奈さん何やってるんですか?」

呆れながらにそうたずねる。

するとイッヒッヒッと笑いながら入れた物の銘柄を見せびらかしてきた。

「唐辛子にタバスコよ。これを奴のポットに仕込んでやったわ。これで奴にこの業界の厳しさを教えてやる。イッヒッヒッ」

……何をやっているのだろうこの人は。

業界の厳しさって、貴女そんな悪戯、誰にもされた事無いでしょうが。昔の少女漫画か。

しかしまあ、このドリンクを飲んだ時に巴さんがどんな反応をするか、確かに興味が無いと言えば嘘になりますね。

だから関与はしないけど止めはしません！

見てない事にすれば見てない事になるのもこの業界の真理ですからね！

表沙汰にならなければそれはやってないが芸能界だ！（あくまで個人の意見です）

そうしている内に森久保さんからアドバイスを聞きだした巴さんがこちらに歩いてきた。

麗奈さんは口笛を鳴らしながらボクと麗奈さんの間に一人座れるスペースを開けて、間にドリンクケースを置く。

「ふぅ、動けば熱いが、止まればやはり冷えてくるのぉ。風邪引く前に、早く着替えねばな」

そう言いながら間に座る巴さん。

片手にはドリンクケース。

「ふくく、風邪対策なら、水分が必要じゃない？　温かい御茶とかさ」

言いながら笑いを手で隠し顔を背ける麗奈さん。

そして村上さんがとうとうその唐辛子入り茶に口を付けた。

・・・・ゴクッ・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・ゴクッゴクッゴクッ。

「!!?」

「ふう、なんじゃ！　伊右衛門とかゆう茶、初めて飲んだが、中々美味いのぉ！　体がポカポカ温まるわ！」

そう言って二杯目をのみ始める村上さん。
その様に麗奈さんと二人で戦慄していた。
「え?　え?　えと、それお、美味しいの?」
「おう、芯から温まるわ。飲むか?」
そう言って巴さんは御茶をコップに注いで麗奈さんに手渡した。
え?　え?　とキョドりながら麗奈さんはおそるおそるその御茶に口を付ける。
＼ギャー／
「んじゃ、トレーニングに先に戻っとる」
口を真っ赤にしながら悲鳴をあげる麗奈さんを振り向く事無く巴さんはフロアに向

かい歩いていく。どんな時も狼狽えない、それも理想のアイドルですね！と軽く尊敬しそうになりながら巴さんの背中を目で追ってしまった。

しかし、まだボクの示した休憩時間は半分にもなっていないにも関わらず、巴さんは今お茶を飲みにきたっきりで碌に休んでいない。

努力とはいえ仲間で取ったトレーニングで、こんな風に休憩をほとんど取らずトレーニングをぶっ通しでやるのはどうだろうか。

それに、ボク達はチームだ。

例え努力だとしても足並みを乱すような事は悪影響だし、このままではチーム仲にすら影響する。巴さんを見て居たたまれなくなり、ふらふらとステップを練習する星さんがその証拠だ。

ボクは仕方無く悪役になる覚悟を決めて巴さんの所に歩み寄る。

軽快にステップ動作を確認する巴さん。

その後ろに立って、ボクは咳払いをする。

ごほんっ。

……。

こちらに気付いたのか、巴さんは足を止めて振り向き、首に巻いているタオルで汗を拭いた。

「なんじゃ、幸の字。話でもあるんか？」

「はい。巴さん、今は休憩時間です。練習は止めて足を休めて下さい」

ボクは冷たい飲み物を渡しながら休憩を促す。

「うちは大丈夫じゃ。まだまだ余裕はある。だから気にせんと休んどれや」

「大丈夫じゃないですよ。努力しているのは解ります。その成長ぶりも、その覚悟も伝わりました。ですが、適度な休憩を取り入れないと身体に良くありません。成長の阻害にもなりかねない、違います？」

筋肉の超回復だって勉強だって、ただやれば良い物ではない。
効率良く質の良い休憩も大事な要素だ。
ボクは経験がらそれを知っている。

「確かに一理ある。じゃがの、休憩が必要になるタイミングってのは人によって違うじゃろ。ウチはまだやれる。皆で合わせて踊る段階なら解るが、今やっとるんはあくまで個人の練習じゃろ？　正直、今のペースじゃウチには全然足りんのじゃ」

そう言って、巴さんが再びダンスレッスンを始める。
その頑なな姿勢にボクはピクピク唇が動いた。

「でもですよ！　これは集団活動でもあるんです！　一人が先走っては、和が乱れます！　一番体力の無い人に合わせて皆で頑張る、それがチームじゃないですか？」

「チームである前にお互いがライバルじゃ。自分がどの程度出来るかどうかはそれぞれが決めればええ。自分でこの世界に入ったなら自分の責任は自分が持つべきじゃ。自分に合わせてそれぞれ頑張る。歩く速度はそれぞれ違うんやからそれでええやろ？そ

れもチームの形や」

「では遅れてしまった人は遅れてしまっている本人のせいだと、チームメイトは己を磨いていればいいんですか？」

ボクの言葉にビキッと反応し、眉をしかめた巴さんがこちらに振り向く。

「……そうは言っとらんじゃろが。もし自分が遅れてる思って、手伝って欲しいゆうんなら助ける。特訓に付き合うしアドバイスも出すわ。じゃがそのアクションは個人でやるべきじゃろ　？なんでもかんでも周りで指示し助け舟出してやるのがチームか？そんなん個が育たんわ」

ぐぬぬぬ。

お互いの目が交差して睨み合う。

その後ろでは麗奈さんが喧嘩か？　みたいに目を輝かせ、森久保さんはその空気に負け白目を向いて体育座りで固まっている。

……ゴンッ！

そんな時、側面方向から何か硬い物をフロアに落としたような鈍い音がフロアに響いた。驚いて振り向くと、星さんがフロアに足を滑らせたのか、頭から倒れ込んでいる。

「星さん!!」

ボクは大急ぎで星さんの所に走っていった。

麗奈さん達も顔色を変えて立ち上がる。

「星さん、大丈夫ですか!?　頭打ってましたけど！」

慌て走り寄るボク等に、頭を抑えながらむくりと起き上がる。そして恥ずかしそうに口角を上げた。

その笑顔にボクも麗奈さんもホッとしたように笑い、星さんの頭を撫でながら微笑み

返す。

「全く、足フラフラの癖にターンなんてするからよ!馬鹿なの?」

「いやあ、フヒ……」

「救急箱持ってきたんですけど、血とかは出てないけど、一応冷やした方がいいんですけど」

森久保さんが救急箱を持ってきてくれていた。

迅速な対応に少し驚かされながら救急箱を開ける。

頭にアイスノンを当てると星さんが冷たっと反応した。そしてにへらっと笑い、ありがとう、とお礼を言う。

「ちょっと輝子、本当に大丈夫?　これ何本に見える?」

「え？　ピースしてるから、二本、」

「腕は一本よ。やっぱアンタ疲れてるのよ！　休みなさい、そうしなさい！」

「こすいんですけど」

麗奈さんのさりげない本音が見え隠れする心配を他所に、ボクは狼狽えながら星さんの応急処置を進めていく。

「すみません！　星さん。監督のボクが目を離してしまったばっかりに……」

「い、いや、違うよ。わ、私が勝手に休憩中なのに動いただけだから、輿水さんのせいじゃ、無い、よ」

「いいえボクのせいです！今日はルキトレさんがいない自主トレだからこそ、リーダーのボクがしっかりしないといけないのに……」

健気に笑う星さんの方が頭を下げてしまう。ボクは焦りながらその頭を上げて貰お

うと必死だった。

そんなボク達の背中越しに冷めた声で巴さんの言葉が投げかけられる。

「そうじゃな。星の失敗じゃ。幸の字には関係無いの」

そう言い放ち、集まるボク達の間を抜けて星さんの前でしゃがみ込んだ。その情けの無い言葉に〝かちん〟ときて、一言怒鳴ってやろうか、そう思っていると、その顔は優しく微笑み、星さんにしゃがみ込んだ。

「星の字、まずは体力付けんと、無理は効かんぞ。怪我したら意味ないけ、気ぃ付けぇや」

「あ、ああ。気を付ける……。一番遅れてるから、頑張らないと、な」

「その気概があるんなら大丈夫じゃ。一応頭打ったけ、今日は止めといた方がええん

じゃないけ？」

「だ、大丈夫。ちょっとびっくりしただけで、痛くない、よ」

「そんならええ。だが気分が悪くなったらすぐに止めろな。星の体の事は星しか解らんからな？」

そう言って巴さんは星さんの肩を軽く小突くと、さっさと立ち上がり自分の練習に戻ろうと歩き出した。

「ちょ、それだけですか!?　仲間が無理をして頭を打ったんだから、もっと心配したりするでしょう！　自分の練習に戻る前に皆で星さんを保健室に……」

「それは星の決める事じゃ」

巴さんは〝じゃろ？〟と星さんに背を向けたまま確認し、そして鏡の前で再びステッ

プを再開する。星さんがなんで無理をしたのかも気にもせず。巴さんは最後まで星さんの転倒を星さんの責任とし、決断を星さんにさせた。

ボクはその横柄で仲間を大切にしないその姿にワナワナと体が震えた。

――――――――――――――――――――

戻って現時刻、事務所の一角。

「仲間はなにより大事です。家族と同じ位に大切にしなくてはなりません」

「……それは、まあそうですね」

「人は、無理をします。無理をしている人間は客観的になんてなれません。そんな時に仲間が見ていてやらないといけないんです」

「……確かに頑張りすぎは、良くありません」

ボクなりに、今の事務所の皆を大切に思っている。思っているからこそココの意見は曲げられない。

「それを巴さんと来たら、どこまでも個人主義！　足並みを揃えようとしないなんて横暴ですよ！」

「そうよ！　生意気よ！」

あんたが言うなと言いたくなる麗奈さんを他所に、ボクは怒りの声を上げる。プロデューサーさんを解放して姿勢を正すと、ようやくプロデューサーさんがネクタイを直しながらボクにコホンと向き直す。

「確かに幸子さんの言っている事は解ります。ですが、巴さんだって仲間を大切に……」

「まだです！　まだボクが言いたい事は続くんですよ！」

「むぐっ！」

スッとシリアス顔になりそうだったプロデューサーの顔を指で押し込んでやった。まだボクのターンは終わって無いでしょ！　まだまとめには入らせませんよ！

「さらに、さらに気にいらないのはですねぇ」

「は、はひでふは？」

プロデューサー何言ってるのかわかりません。もっとハキハキ喋って下さい。
そして、ボクはこの根拠に自信を持っている。彼女は先輩だ後輩だ年上だのを意識している節は無い。そんな事を言ったら麗奈さんだってそうですが、リーダーであるボクの言葉に敬意を持っていないんです。

「巴さんは、ボイトレでも駆け足でも、常にトップの成績を収めているんですよ」

「は、はい」

「何事にも屈せず、常に前を向いて努力する姿には目を奪われました」

「な、なるほど」

「体力もあって、度胸もあって、凛々しくて……全然新人らしい可愛さが無いじゃないですか!!!」

「そこですか!?」

クワッと目を見開いて〝強いられてる〟ばりに集中線を使って言い切った。

それとはなんですか！

ボクのような先輩アイドルには物凄い悩みですよ！　色々な世界で、常に下に追い抜かれる事を恐れている先輩がいくらいると思っているのでしょう！　追われる方がプレッシャーは大きいんです！

つまり、それらを纏めると、問題は巴さんは仲間に対する配慮、そしてボクを先輩として、リーダーとしての敬意をもっていないという事です！　それが実に気にいりません！

ボクのトレーニングメニュー所か、普段の生活、事務所のルール、その何もかも巴さんは〝自分の筋〟を優先して聞いてくれません！　ボクをリーダーとして敬わっていないからです！

確かに巴さんの言ってる事は一部解る部分はありますが、ボク達はチームなんです！

一番能力の低い人に合わせて足並みをそろえて皆で強くなるべきでしょう！

それに、指示を無視しても向上心だからといってそれを無視していい理由にはなりま

せん！

「敬っていないとどうなるか、指揮系統が乱れ、頭が分かれて組織として瓦解してしまうという事です！　つまり事務所の危機と言っても過言では無いでしょう。違いますか？」

「ま、まあ、誰が責任者で統制者なのかはハッキリさせないと組織というか、会社だとしたらヤバいっすが……」

「そして事務所がやばいという事は、ボクが可愛いという事を世界に知らしめる事が遅れ、世界の損失です！　違いますか！」

「あ、あ、ハイ……」

押し負けたように縮こまるプロデューサーの机を叩き、ボクは顔を近づける。

「という訳で、リーダーが誰なのか、ハッキリさせてやろうと思います」

「リーダーが、ですか」

困り顔のプロデューサーもようやくボクの目を見て答えた。

「そうです。この際彼女には、ボクとどちらが上なのかをハッキリさせておかなくてはなりません。完膚無きまでに叩きのめして上下関係を教え込む事から始めようと思います」

ボクがプロデューサーにこの話をしたのは、何もプロデューサーから言って欲しい、とかそんな弱気な理由ではない。これから、ボクは戦いに行ってくるという報告だ。

「勿論、彼女がボクより優れているというのであれば、新しいリーダーは彼女です。ですが、そうは問屋が卸しませんよ！　ぎゃふんと言わせてやります」

「ぎゃふんとか、言ってる人初めて見ました」

そしてボクは扉に振り返り、歩みを進めた。出撃の覚悟を決めた歩みで。

「アタシも一緒に行くわ。アイツを倒すのは、このアタシ。そしてリーダーに相応しいのもね」

「麗奈さん……」

なんて事だ。共通の敵（優秀な後輩）を得た事で、ボク達の団結力は深まったようです。これなら、もう、何も怖くない。

「森久保は事務所で小さくなってるんですけど」

「駄目よ。今度は協力しなさい。打倒ヤクザ女よ」

「森久保は争いなんて嫌なんですけど～！」ズルズル

「という訳でプロデューサー、今から隣でレッスンしてる巴さん達を連れて町に行ってきます。留守は、任せましたよ」

「あ、ちょ……」

ボクの心配をしているのか困ったように手を伸ばすプロデューサーに振り返りもせずボクと麗奈さんは森久保さんの手を引いて部屋を後にする。

こうして、ボク達のアイドル選抜が始まった。

「今日は皆さんに挨拶したいという人が、お～い……」

プロデューサーの寂しそうな声が静かな事務所に悲しく響き渡り、そして返事が返ってくる事は無かった。